
東方仙人伝

滓魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方仙人伝

【Nコード】

N8782X

【作者名】

滓魔

【あらすじ】

なぜか目が覚めたら森の中だった。

これはいつのまにかチートになっていた主人公が東方の世界で奮戦するひとつの物語です。

これは妄想でできている部分もあります。

ゝ程度の能力と南斗聖拳（前書き）

なんだか妄想が抑えられずに書いてしまいました。

なんだか今かなければいつ書くんだという気になってしまいました
て…

自分はテンションが高くなるとたまにおかしなことをかくのでご了承
承ください。

ゝ程度の能力と南斗聖拳

ああー東方いいよ東方

てか…常識外れもいいとこだな…

はあゝいききたいなー死んでもいいから行きたい…

さて寝よう…

うーむ…眠れん

学校とかでは十秒くらいで眠気が襲ってくるのに…
なぜか家では一時間以上眠くならないんだよな…

…眠く…

「よく寝た、よく寝た」

「うん？」

そこで俺はおかしいことに気がついた。
なんだか体が軽いような…というかそれ以前に寝ていた場所がおか

しい。

どこだこは

辺り一面、木、木、木、木…木しかない。

つまり森ということだが…俺は家の布団で寝たのであってこんなところで寝た覚えはない。

というか夢遊病？それとも俺の厨二病が悪化したか？

いやそのまえにこれはそもそも現実なのか？

現実に近い夢なら何度も見たことがある。

今回もその可能性が高いな…

三十分ほどその場で座ってゆっくりと考え景色を眺めていたら俺は自分の名前さえ思い出せなくなっていた。

どういうことだ？

俺はたしかに忘れっぽいしのんびりで厨二だけどさすがに自分の名前を忘れるほど物忘れが激しいわけがない。ましてや俺はまだ十五歳だ。

そんな年でもない。

しかたがないので適当にのんびりと歩くことにした。

俺のこの時の考えは真っ直ぐ歩いていればいつか出られるだろうという楽観的な考えだった。

しかし現実是非常である。

木以外に見つかったものといえば洞穴と滝と谷だけだった。

…いくらなんでもおかしい。

すると俺の頭の中にこんな言葉が浮かんできた。

忘れる程度有能力… 眠る程度有能力…

「…」

思わず俺は茫然としたまさか、自分の厨二病が自動的に能力名を考え記憶を失い妙な夢を見てしまうほどに進行していたなんて…

そう思っていた時期が俺にもありました。

だが適当に思いついた妄想をしていたらなんと森の中からでられたのだ。

ヒヤッハー！外だー！

そして、俺は喉が渴いたので嫌々ながら近くにあった水場で水を飲むことにした。

このとき俺は気づいてはいけないうちに気づいてしまった。
なぜか俺の顔がアニメ風になっていたのだ。

「…こりゃまじめに考えないと…いや…なるようになるだろう」

俺はどちらかという心の中で考えてあまり口にはださないタイプだ。

それに俺はいつも運頼みで何事もなるようにしかないと考えている。

困った時の神頼みってな。

そして俺は適当に神頼みで矢印を四方向に書き選ぶことにした。

「どれにしようかな、天の神様の言うとおり！」

俺が選ぶことになったのは森を抜けてちょうど右の方向だった。

ふう…しっかしなんだかなあ…なんだかこう東方に來たら來たで嬉しいんだけど…

目的をまた一つ達成したって感じで虚無感というか虚しいというか…が襲ってくるんだよねえ

さーて進路が決まったのはいいが問題はこの能力の使い道だ。

眠る程度の能力はまだ使い道がある。

夜に寝たいときに便利だ。

が、問題はもう一つの忘れる程度の能力だ。

進化でもしてせめて対象を俺じゃなくて他人にしてほしいもんだ。

このままじゃ本当に何もかも忘れることになる。

うーん…ところでここはどこで今は何年なんだろうか…

これが分からなければまるでお話にならないからな…

はあ…もういいや森に戻ろう…

やっぱりこういうときは一番最初にいたところから動かないのが一番だよな

適当に途中にあった洞窟にでも住むかな
ところで洞窟の場所…覚えてないんだが？

どうしてこうなったと言うしかないな
そういえばこういうのってほとんどは妖怪になってたりかなり大昔
だったりそのまんま幻想入りてきな展開だよな…

俺の場合はどうなんだろうか…
なんだか直感的に大昔な気がしてきた。
だって色々と環境がおかしいし…

うーんそういえば最後に見たアニメは北斗の拳だったな…
しかし南斗も北斗もチートすぎだろ。
こうしゅぱっと

シュッ

スー

ボトッ

「これがリアルボトリ！」

つて…ちよつとまて

今何が起きた…

俺は賢くはないし馬鹿の中の馬鹿だがこういうときは冷静になるのが重要だったはずだ

…まず整理しよう俺は北斗と南斗はチートすぎだと思った 南斗のイメージ通りに手を横に振った 木が切れて地面に落ちた…

俺も人間卒業か

いや…まてよ…冷静に考えたらこれはこれで…

しかもその気になれば「お前はもう死んでいる」ができるじゃないか！？

あ…だめだ…忘れた…

ナンテコッタイ…

こうなったら八つ当たりしかないな…

「ふんッ！」

俺は思いっきりちようど横にあつた木に腕を振った
すると木は面白いように壊れて吹き飛んで行った。

↓数時間後↓

これはひどいw

もう色々と滅茶苦茶になっていた。

すっかり忘れていたが俺の恰好は自転車や車の書かれた子供っぽい
パジャマだ。

いやおかしいということとは自覚してる…こんな年にもなって…ってな

だが仕方ないだろう。

家に碌なものが置いていなかったのだ…

ふう…これからは南斗を鍛えていくかな…

だって北斗とかいちいち覚えてねーし

覚えたとしてもどうせ忘れるし…

はあ…

「南斗獄屠拳！」

スタツ…

決まった…

ハッ！

いかんいかんこういいうので慢心したらいかん！

だいたい東方の住民はみんなとんでもない化け物だったはず…

これからゆつくりと力をつけていくしかないな…

南斗を再現することにも今のところは一部だが成功しているし南斗孤鷲拳の再現は一通り終わった。

他の南斗の技はためしてないけどな…

これからの予定はこうだ。

まずは南斗の技を体に覚えこませ、これでもかというくらいにか
く技を使いまくる。

そして何度か同じことを繰り返してこの森をでるというものだ。
でなければたちまち全てを忘れることになるだろう。

そうなってもせめて最低限戦えるようにはしておきたいのだ。
くそうこれも全て能力のせいだー！

眠くなってきた…

お休みなさい…

ゝ程度の能力と南斗聖拳（後書き）

どうでしたでしょうか？

少しくらいハンデがないと主人公が最強なだけの話になってしまい
そうだったので…

カこそ正義！良い時代になったものだ（前書き）

キングクリムゾン！

力こそ正義！良い時代になったものだ

あれからどれだけの時間がたったのか…

今日はそろそろ外を本格的に探索しようと思う。

あと南斗聖拳は南斗水鳥拳と南斗孤鷲拳をいつでも繰り出せるくらい修行した。

俺にはそもそも才能がないのでかなり時間がかかったのだ。能力の妨害もあったがなんとか維持することに成功している。早くこの呪縛から解き放たれたいものだ…

というより最近疑問に思っているのは俺の種族だ。

こういう場合かなりの高確率で妖怪なんだが…

確実に妖怪だ！って言えるくらいの自信は、はつきり言っていない。

体に覚えこませれば記憶にしか能力の影響がないのであればだいたいの技をなんとなく思い出すことができる。

というより体が勝手に動くくらいやったからな…

外を探索するうえでの問題点は人がいるかどうか…ということと帰り道を覚えていられるかだが…

帰り道のほうは簡単に解決した。

適当に周囲に切り傷をつけていくことにしたのだ。

それにしてもこの森は…再生力が凄まじいな。

なんせ1週間ほど前に切った木がすでに完全に再生しているのだ。

今回はすんなりと出られたな。

うん？

俺が前方に目を凝らすとかすかに煙が空に昇って行くのが見えた。
もしかするともしかするかもしれない…

なんだか小腹が減ったな…

俺は近くにあった川で魚をとって朝食をとることにした。
途中で熊に襲われたが瞬時に切り裂き朝食のたしにした。

うーんおいしいねえ…

平和っていいね。

さて改めて出発するかな。

〔数時間後〕

道中で色々あったがたいしたことではなかった。

それより問題は人の住んでいる集落のようなものが目の前にあることだ。

そこではお祭り騒ぎでごちそうや見たこともない飲み物が大量にあった。

…じゅるり

ハッ！？

いつのまにかよだれがでていた。

…まだまだ修行が足りないな。

だが周囲を探ると何人かがこちらの様子を窺っていた。

「…」

「『動くな！』『動くな！』」

「だが断る！」

ネタでいつものように断ってしまった。

するといきなり手に持っていた槍のようなものを持って突進してきた。

猪じゃあるまいし…

「南斗飛燕斬！」

すると当たり前だがあっという間に全滅した。

「ふん」

そして俺は振り向きざまに飛んできた矢を避けると一瞬で間合いを

つめ手刀で貫いた。

どうやら俺は歓迎されていないらしい。

まあ、いきなり現れて抵抗するのも悪いとは思うがやはり俺の中では力こそ正義！である。

所詮この世は弱肉強食なのだ。

とりあえずあの村は観察することにした。

なので近くに洞窟がないか捜した結果かなりいいところにあつた。

そこは木で囲まれてはいるが少し歩けばすぐに集落を見ることができる場所までいける。

つまりあちら側からは見えないということだ。

〈観察〉

一日目：騒がしかった。おそらくさっきの奴らが帰ってこないのが原因だろう。

二日目：何人かが集落からでた。行方不明者を探しているのだろうか。

三日目：特に変化なし。

四日目：数人がこの洞窟の周辺に近付いてきたので始末した。

五日目：特に変わったことはない。

六日目：集落からでた何人かが戻ってきたようだ。

七日目：集落にいた子供以外の奴らは全員が集落の中央にある大きな建物に朝早くから集合していた。集会所のようなものなのだろうか。今は昼ごろだがなかなかでてこない。夜中になってようやく解散したようだ。話の内容はおそらく俺に関することだろう。

キングクリムゾン！

あれから一カ月ほど経つがどこに貯蔵していたのか誰も村からでていない。

しょうがないのでしばらく放置することにした。

キンクリ！

あれからはもう数えていないので今はどれだけ時間が経っているのかはわからない。

だが変化があった。

まずあきらかに人ではないものが集落に侵入していた。

そのせいでパニック状態だったようだ、それが何回か続くと次第に柵が高くなったり武装している奴が増えた。

今日は俺もどさくさに紛れて侵入することにした。

「うわぁー妖怪だー！妖怪がでたぞー！」

高台にいた男はすぐ横にぶらさがっている警報代わりのよく響く板を棒で叩いていた。

すると妖怪が三匹ほどいた。

特徴は角があった。これがもっともわかりやすい特徴だった。

そのなかの一匹が俺に気づいて走ってお近寄ってきたかと思ったらいきなり吠えた。

普通の人間ならひるむだろうが…ビビって逃げていくとも思っているのか？

俺がしばらくそうやって見ているとなにやら焦った様子で殴るふりをしてきた。

よく他の二匹の妖怪も見ると建物や食物に被害がでるだけで人間には勝手にころんでるやつくらいしか怪我人はいない。

俺は面倒だったので頭を軽く殴った。

すると吹き飛んでいき木でできた壁に頭から埋まった。

他の二匹はそれを見るなり急いで吹き飛んだ奴を壁から引き抜き俺を警戒するように睨んだ。

「ふははははは！」

いきなり笑いだした俺を一瞬怯えたような眼で見たがすぐに元に戻った。

俺は目の前に一瞬で移動した。

普通の人間には俺が瞬間移動したように見えるかもしれない。

妖怪のほうは目を見開いて慌てて逃げようとしたが時すでに遅し。

「南斗飛燕斬！」

三匹は宙を舞い地面にそのまま落ちた。

一匹だけは意識を失っていなかったようで呻いていたが俺はそいつの頭を踏み台にして片足で押さえつけると集落の奴らは少しの間静かだったがいきなり

「うおおおおおおおおお！！！」

と歓声をあげた。

やはりこの時代は力こそ正義だな。

すると一人の老人が「もしよろしければ…」と言ってきた。

「まずは食糧と水だ」

「かしこまりました」

そのまま老人は近くにいた奴に話しかけると食料と水を持ってこさ

せた。

…少ないな。

「
…」

「こ、これだけしかありません。どうかご勘弁を…」

俺の気配でなんとなく察したらしくそう言ってきた。

「まだだ。まだ足りぬ。もっともってこい。それも一つや二つではない…全部だ！」

「それはいくらなんでも…」

「なあにいゝ？この俺に逆らおうというのか？」

「めっそもごいません！ただそんなことをしてしまうと我々の明日が…」

「貴様らのことなど知ったことではないわ！」

「…それとも死にたいか？」

「ひ、ひいっ！」

「す…すぐに取ってこさせます！」

と言ってすぐに走ってどこかに行ってしまった。

「力こそ正義！良い時代になったものだ」

結局あのあと食糧や水を全て提供（笑）してもらった。
そして今は妖怪の処刑がおこなわれるところだ。
どうやら何度も来ていたようで公開処刑されるようだ。

妖怪たちは泣きながら命乞いをしていた。
よくよく見ればなかなか綺麗な子供の鬼で将来は美人になるだろう。

するとその鬼が

「何でもしますから誰か助けてくださいー！！」
と集落中に響き渡るほどの大声で叫んだ。

俺はその子鬼達のところに歩いて行っただ。
誰もが俺を畏れた様子で見えていて俺が歩く道を開けた。

「おい鬼。今の言葉、間違いないだろうな？」

「は、はいい…な、何でもしますから助けてください…」

と非常に小さい声で言った。

「なあにいゝ？聞こえんなあ！」

「あなたの言うことを何でも聞きますから助けてください！」

そう言った。

「ふはははは！よかろう。助けてやる。」

「ふ、ふざけるなー！村の食料を奪ったくせに今度は妖怪の味方かよ！」

「貴様ら…この俺に逆らうか！」

俺が一番近くにいたやつ胸を貫くとそのまま空中に飛び上がり南

斗飛燕斬を放ち一掃した。

そうしてこの村は滅んだ。

力こそ正義！良い時代になったものだ（後書き）

少し疲れたので前半と後半に分けます。

木人形（デク）（前書き）

投下します

木人形（デク）

さうて邪魔なやつらも始末したことだしそろそろこいつらと話してみるか…

「おい」

「は、はい…」

しばらく何か考えていたようなので話しかけてみると何かを言おうとしている。
何だろうか…

「わ、私の名前は…」

「貴様の名前などどうでもいい」

「それよりもさっきの話だが…偽りはないだろうか？」

「はい、ありません」

「ククク…そうか…では、さっそく洞窟に戻るとするか…」

ククク…いい木人形が手に入った…

こいつら妖怪は人間と比べて高い生命力を持っているからな。特に鬼は生命力が強く肉体も頑丈だ。しばらくは俺の実験にも耐えるだろう。

く洞窟（自宅）く

さてついたか…

「おい、その二匹」
そついうと睨んできたが

「何だその目は！」
と怒鳴るとすぐにおとなしくなった。
なんだか俺が一方的に虐めてるみたいだな…

「私たちでしょうか…」

「ああ、お前達だ。その一匹を抑えておけ」

「…絶対に離すなよ？」

「お前はその上に寝ている」

そうなのだ。俺はこんなこともあるつかと岩を削って台を作っていたのだ。

なぜこんなことをするかというと既に気づいているだろうが…アミバのやっていたように秘孔を発見すべく準備しておいたのだ。まあもちろん秘孔の位置なんて知らないので適当に体中を指で押していくことになるのだが…

かなり残酷だな…今更だが…まあ、これも生きるためだ。

「な、何を…」

「なあに秘孔の位置を探るだけだ。かなりの苦痛をとまなうが…我慢しろ」

「そ、そんな」

「お前達はこう言ったはずだな…助けてくれたら何でもします。と」

「お前達は仮にも鬼だろう。鬼は嘘をつかぬと聞いていたが…」

「嘘はつきません！」

こんなときだけ大声をだすもんなあ…
ていうか何で敬語なんだ？
まあ、いいか。

「では行くぞ…ハア！」

ズブ…ズブ…ズズズ…

「ガ…アアア…ク…ア」

必死に耐えているようだ。

そんな様子を見てるとなんだか顔が緩んできた。

まあ、つまりはニヤついているということだ。

俺は元々Sよりなんだ。

今ので変なシーンを想像した奴は…

まあいい。

「お？」

なんだかいけそうな気がしてきた。

成功すれば…ククク…

押さえつけている二匹の方を見ると目をつぶっている。

口の間からは血が流れていた。

随分と仲間思いだな…

俺なら笑いながら喜んで押さえつけるぞ

「ぎゃああああ」

「ん？間違ったかな」

俺が首をかしげていると気絶したようだ。

それにしても気絶するだけか…なんだかそんなことをできそうな秘孔があつた気がするが…まあそのうちわかるだろう。

「ふむ…」

「うつうつ…」

横を見ると二匹とも泣いていた。
ふん、五月蠅い奴らだな。

「泣くなら外で泣け。五月蠅いからな」
俺がそういうと二匹とも外に行った。

まったく…

「数十年後」

最近は順調に秘孔を探ることができている。

最近だけでもこの数十年では秘孔らしきものがいくつも見つかった
いる。

効果はだいたいわかっている。

忘れてもいいようにメモをとっているからな。

鬼達に見せてやると首をかしげていた。

まあ、見せてもこいつらでは真似すらできんだろつ。

「ぎゃあああああああ！」

「助けてくれえええええ！」

今はいくつもの悲鳴が飛び交っている。

何をしているかというところ最近になって数を増やした妖怪を捕獲して
秘孔を探っているのだ。

うまくやらないと突き殺してしまうからな。

「ひでぶー！」

「うわらばー！」

「わかめー！」

なんだかさつきから変な断末魔が聞こえてくるが気のせいだろう。

秘孔に名前はつけていない。

そんなことしたら覚えるのが面倒だからな。

あの鬼達は今も生きている。

まったく運のいい奴らだ。

何度も突かれているのにかかわらずしぶとく生き延びている。

あと言い忘れていたが最近になって急激に発展している街を見つけた。

あきらかに場違いである。

一度妖怪の軍団を差し向けたが黒こげにされていた。

ビームやレーザーの類だろう。

他にも銃弾のようなものもあった。

まったくどうなっているのやら…

その街は最初に見かけたときは小さな原始的な集落だったが、数年もすると江戸時代風になり最近ではまさに未来都市！とでも言うのだろうか…そんなふうになっていた。

なんだか見えない壁もあったしな。触れた瞬間妖怪が消滅していた。

妖怪たちもこの事態にさすがに危機感を抱いているらしく活動が活発になってきている。

このままいけば妖怪と人間との戦争になりかねん。

あと言っていなかったが北斗剛掌波を使えるようになった。

「ぼ、ボスケー」

「お前はもう死んでいる」

「べ、べらばああ！」

「数日後」

なんだか最近ではとある山にて妖怪達の集会が開かれているらしい。なぜ知っているのかというとあの三匹の鬼が夜になるとそこそそと出かけているのだ。

あの鬼達も最近では反抗的になっている。

だいぶ前に妖怪なのか？と聞かれたときに俺はこう答えた

「いいや、俺は人間だ」

すると

「「「お前のような人間がいるか！」「」」
と三匹に同時言われた。

「…だってあれから何十年もたっているのに年をとっていないじゃないか！」

あれから何十年もたっていたのか…と俺はそのときにはじめて知った。

まあ、素手で岩を砕き鋼をも斬り裂くような奴が人間だと言っても俺も信じないがな。

「新秘孔の究明だー!!」

「「「ぎゃあああああああああああああああああ!!」

「「「」

木人形（デク）（後書き）

どうでしたでしょうか？

八意永琳（前書き）

投下します

八意永琳

どうしてこうなった…

俺は今、未来都市の前にいる。

なぜか？それはまあ…その…なんだ
妖怪たちが誰が偵察に行くかということでは話し合ってるところに偶然、遭遇してしまいくじ引きできめよう！
というわけのわからない展開になり不運にも俺が選ばれてしまったのだ。

「はあ…」

「きゃー」

「うん？」

何事かと見ると崖から落ちそうになっている珍妙な服を着た少女がいた。

どこかで見たような…見てないような…

周りを見ても誰もいない。

このまま帰ろうと思ったときにふと思った。

もしここで助けてやれば…

俺が助ける 感謝される 都市に入れるかも…

なんてことになったりして…

とりあえず助けてやるか

「おい小娘」

「…なにかしら」

うわーなんだコイツ…今にも崖から落ちそうになっているのにかなり偉そうだぞ…

殺してやるうか…

そんなことしたら面倒なことになりかねんからやらんがな

「助けてほしいか？」

「ええ」

「ほれこの手を掴め」

「…一応礼は言っておくわ」

さつきからむかつくガキだな…

「それにしてもあなた何者かしら」

「このあたりは妖怪がでて危ないのよ？」

「そうか…これでも一応鍛えてるんでな」

「…」

はあ…また歓迎されてないパターンかよ…
なんか取り囲まれているんだが？

「動くな！」

まあいいか…

激流に身を任せ同化する。激流を制するは静水ってどこかで聞いたしな…

なるようになるだろう…

「へいへい」

「もう一度質問するわ。あなたは何者かしら」

「ただの人間ですがなにか？」

「…あなた自分の立場がわかってるのかしら」

「ぱんつを見せろ」

「この者を牢に入れておきなさい」

「はっ！」

「数十分後」

「ククク…計画通り！」

あの状況であんな変態発言をすればおそらくこうなるだろうと予想してあえて言っただよ！

「ふははははは！」

「うるさいぞ！黙れ！」

「それにしてもお前、よくあんな命知らずなことが言えたな」

「ヒッハー！水と食料だー！」

「お前…よくそんなまずい飯が食えるな…」

「黙れ！飯がまずくなる！」

「…元々まずいだろ…」

「二度も同じことをいわせるな！」

「あー！うるさい！黙れ！そんなに大声をださなくても聞こえてるからやめろ！耳がおかしくなりそうだ！」

「お前も馬鹿なやつだなー」

「なぜだ？」

「永琳様はな人間を使って実験をしているんだよ」

「ほう…」

良いことを聞いた

まさかあの小娘が俺の同志だったとは…

「じゃあ俺もその実験台にされるのか？」

「ああ、間違いない。この都市で牢屋に入れられたものはどこかに

連れていかれてその後の行方は誰も知らない」

「ククク…おもしろそうだな」

「お前、頭がお「おいその囚人を牢屋からだせ」…はい！今すぐに！」

何人かの黒いスーツに身を包んだ男が現れた。

こいつらが俺を親切にも案内してくれるやからは…

すると看守が小さい声で

「お前も運の悪い奴だな」うらむなら自分の運の無さをうらんでくれよ？」

「ふん、別にお前をうらむつもりはない」

「サラダバー」

「しっかりついてこい」

そして、目隠しをしてきた

そうして歩くこと数分…

「あら…また会ったわね」

「そういえば名前を聞いていなかったな」

「そういつときはまず自分から名乗るのが礼儀じゃないかしら？」

「知ったことではないな」

「…私の名前は八意永琳よ」

「…」

「何かいい残すことはないかしら？」

「ククク…」

「何がおかし…ぐっ!？」

「な…なに…を…」

「何をだと？」

「お前は天才か？」

「…ええ」

「なら自分でなんとかするんだな」

「くっ」

「まあ…これからお前にはいくつかの質問に答えてもらう」

「…」

「まずこの都市に展開されている見えない壁を消すにはどうしたらいい？」

「ぐっ…く…口が、勝手に…」

「それは評議会の議員の全員の部屋にあるボタンとそこにあるボタンを押さなければ消えないわ」

「貴重な情報をありがとさん」

俺はボタンを押すと

再び秘孔を突き突いた瞬間の記憶を消した。もちろん気絶している。

「評議員の部屋」

「おじゃまします」

「だ…ふっ！？」

「さうてボタンはどこにあるんだ？」

「そ…そこに…ふべらば！」

そうしていくつかの部屋にいった。

目的も達成したしさっさと帰るか…

八意永琳（後書き）

今回はここで終わります

仙人の目と仙人の肉体の両方が備わって最強に見える（前書き）

投下します

仙人の目と仙人の肉体の両方が備わって最強に見える

はあ…

「き…きろ…ろ…お…ろ…おきろー！！！」

「うおおおおお！？」

「やっと起きたのか」

「うん？なんだお前か」

無理やり起こされたのでまだぼんやりとだが反抗的になった三匹のうちの一匹がそこにはいた。
まったく…こんな朝早くから何だというんだ…

「人間がまた領土を広げている」

「そんなことで俺を起こしたのか…」

洞窟の外を見るとまだ霧がかかっていて薄暗かった。

「こんなこととはなんだ！人間と妖怪とで戦争になるかもしれないんだぞ！」

たしか妖怪の中で唯一人間は危険だとはっきり認識していたのはこいつだったな…

他の妖怪はどうせ人間なんてたいしたことがないと思っているようだが…

人間ほど恐ろしいものも少ないだろう。

とくに無駄に科学技術の発達した人間ほど怖いものはない。

「で？俺にどうしろと言うんだ」

「言っておくが俺にはそんな力はない」

「ふん。何がないだ。周囲一体の妖怪たちを拳で屈服させたのはお前だろう！」

「いや…あれは成り行きと言うか…」

「とにかく！お前には責任をとってもらうからな！」

「ふ、不幸だ…」

行っ たか…

それにしても最近は不幸の連続だ…

妖怪たちと大乱闘したり鬼に顔をぶん殴られたり…

空から爆弾が雨あられと降ってきたり…

ミサイルが洞窟に撃ちこまれたり…

山火事が起きたり…

洪水になったり…

雷にうたれたり…

考えれば考えるほど不幸な出来事が…

「はあ…」

さっそく眠るか…

おやすみなさい…

↓ 数時間後 ↓

「今何時だ」

「昼だ」

「そうか…昼か…」

そろそろ外にでて日の光を浴びるか…

「やっぱり起きたばかりの背伸びは最高だねえ」

ひゅー—————

ぱさっ

するといきなり目の前が真っ暗に…なんだか頭に覆いかぶさっているような…

「!?!」

「なんぞ?」

よく見ると服のようだった。言い忘れていたが俺の今の恰好は布を無理やりつなげたようなボロだ。

「…」

そして、それは黒地に赤雲の模様が描かれた外套のようなものと笠の装束だった。

「な…なんじゃこりゃー！」

なぜかすでに俺に着せられていた。

ボロはどこにいったのだろうか…

するとひとつの手紙のようなものがあつた。
開けてみるとそこには

「信仰してくれてありがとう」

と一言だけ書かれていた。

もしかしなくても神様からの贈り物？

「ヒヤッハー！贈り物だー！」

「な、なんだ！？」

ざわ…ざわ…

「お前…どうしたんだ？その格好それにその眼は…」

「？」

すると手鏡を渡されたので見てみると俺の眼は…輪廻眼になっていた。

そして…気づいたことが他にも一つある。

能力が両方とも消えてなくなっているということだ。

「…」

つまりは

もう能力のせいで記憶喪失になることがない！！！！

「ヒッハー神様最高ー！」

「うん？」

周りを見てみると

妖怪たちが集まっていて俺をポカーンとした様子で見ていた。

「>
<><
」

「「「「「こつち見んな!!」「」「」「」

「ぐぼっ!？」

顔面と腹にパンチをもらった。

「お、俺は何も…ガクッ…」

「数時間後」

「…」

「やっと目が覚めたのかい？」

「お前は…」

「忘れちゃったのかい？私だよわたし」

今俺と話しているこいつは河童の妖怪で医者をやっている。
ちなみにかなりの凄腕で今までに治療できなかったものはないとい

う。

「あとそんな目で私を見ないでほしいんだけどねえ…」

「おいィ？お前までそんなことを言うのか？」

「ははは！冗談だよ。冗談」

「それにしても変ったねえ…」

「何がだ？」

「あんた昔は私達をまるでゴミみたいに扱っていたじゃないか」

「そうか…」

俺は全ての記憶を思い出した。

妖怪たちへ残虐の限りを尽くした自分を…

「昔のことだと忘れてくれとは言わん」

「どうしても言っがいい」

「あんた何かに取りつかれてたんじゃないのかい？」

「きつとほかの奴らに今のお前さんを見せてやったらきつとダレダオマエって言われるよ？」

「……」

「穴があつたら潜りたい……」

「はぁ……」

「しかし、あんたよく見たらいい男じゃないか」

「やめろ」

「俺は褒められるのが嫌いなんだ」

「そっなのかい？」

「昔からな」

「そりゃ悪かったね」

「別に謝ることでもない」

「それにしても最近人間も妖怪も活発だしねえ……」

「近々、戦争が起こるらしいよ?」

「まったく……くだらん」

「本当だねえ……」

「さて……俺はそろそろここから出ても良いんだよね?」

「ああ、もともとあんた怪我ひとつなかったよ?」

「助骨が折れてたくらいで」

「おいイ!？」

「ははは！」

「まったく…」

「じゃあな」

「また何かあったらいつでも来なよ！」

「わかった！」

まったく…良い妖怪もいるじゃないか…

仙人の目と仙人の肉体の両方が備わって最強に見える（後書き）

あ…ありのまま今起こったことを話すぜ！

「俺はいつものように小説を書いていたと思ったらいつのまにかこんな展開になっていた」

な…何を言っているのかわからねーと思うが俺も何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった勝手に手が動いたとか無意識だとか

そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

本当にどうしてこうなった…

下準備（前書き）

投下します

下準備

今、俺は妖怪たちと話し合っている。
もちろん人間のことにについてだ。

「で？」

「…あの後、攻め込んだ妖怪たちは全て全滅した」

「どうしてそうなった？」

「お前がちゃんとしなかったからだろう！」

これからはこいつのことを知阿鬼と呼ぶことにした。
知阿鬼は俺の胸倉をつかむとそう叫んだ。

「知らんな。俺はちゃんと役目を果たした」

「貴様ア！」

「とりあえず落ち着け。軍師のお前が我を忘れてどうする」

「くっ…」

まったく…それじゃあ俺の冒険は無駄に終わったのか…

あるときは触るな危険と堂々と壁に配置されていたボタンを押したり…

またあるときはもう二度と見たくないゲイの像の尻に議員が持っていた棒を突き刺したり…

あるときは議員がスイッチにして持ち歩いてたり…

またあるときはパスワードを制限時間内に入力しなければ爆発してしまう仕掛けを解いたり…

あるときは休まずに急いでも脱出するのに四日はかかる様々な仕掛けの施された地下ダンジョンをさまよったり…

はあ…

「…人間はまるで我々が来るのがわかっているようだった…」

「そりやお前…議員やらなんやらが殺されまくったあげく見えない壁が無くなったのにわからねえわけねえだろ」

「しかし…」

「おーい！」

なんだ？

そう思って見ると一人の河童がそこにはいた。

「あの都市の仕組みがわかったぞ！」

「ほう…」

「本当か！」

「ああ！本当だとも！」

「なぜ今まで気づかなかったのか不思議なくらい簡単な仕組みだった」

「それは？」

「それは…」

ゴクリ…

「それは…」

「早く言わんかい！」

「フヒヒwサーセンw」

「まったく…」

「実はもうひとつ見えない壁のようなものがあってそれが探知式で都市を囲むように展開されているんだ」

「なるほど…」

「つまりはあれか？議員を何人殺されようが壁を取り払われようが痛くもかゆくもなかったってか？」

「んー…まあ、そういうことだね。何があったかは知らないけどご愁傷様」

「うおおおおおおおー!!」

「あとついでだけど例のアレ…もうできてるよ」

「おおおお！本当か!？」

「本当、本当」

「ちようどこに持ってきてるんだ」

例のアレというのはペイン六道が持っていた黒いバールのようなものだ。

あれにはさすがの河童たちも最初は首をかしげていたがなんとなくわかったらしく作成することができた。

まあ、俺も手伝わされたけどね…

「ほれ」

「おお…」

完璧だ…あとはちゃんと効果があるかがわかれば…

「ちゃんと効果があるか試してあるから大丈夫だよ」

「何から何まですまん！」

「いや、久々に腕がなったよ。骨のある仕事をありがとう」

「これからよろしく頼む！」

「ふふふふ…たしか大量に…だったよね？」

「そうそう悪いな」

「いや別にいいよ」

「いやー本当に河童という妖怪はすごいな…」

「それで…都市に侵入するにはどうしたらいいと思う？」

「うーむ…さてよ…ククク…」

良いことを思いついた…探知式の壁なら裏をかけるかもしれん…

「良いことを思いついたぞ」

「それはなんだ？」

「それにはな…まずは契約をしなければならぬ」

「契約？」

契約というのはもちろん口寄せをするための契約だ。
ペインたちが木の葉の里に侵入する際に使った手口でいかせてもら
う。

〈作戦説明中〉

「なるほど！」

「わかったら妖怪たちを集めてくれ」

「わかった！戦闘に参加する全ての妖怪を集めてくる！」

ちなみに当然と言えば当然ではあるが戦闘をするための妖怪と怪我や病気を治す妖怪、河童たちのように様々な道具を開発する妖怪がいる。

〈数日後〉

「ふう…」

「じゃあ契約と作戦について説明する！」

「まず契約というのは口寄せをするうえで欠かせない儀式のことだ」

「口寄せ？」

「まあ俺だけが使うことのできる忍術…と言ったらいいか…まあ簡単に言つと時間を超えて自分のいる場所に呼び寄せることができる」

「便利だなあ…」

「契約には血が必要だな」

「じゃあ採血しないといけないのか」

「契約中」

「ふう…これで終わったか…」

「作戦というのは？」

「一人の妖怪が聞いてきた。」

「作戦と言うのはな…俺と鬼がまず都市の近くの森まで行く。そして、そこで鬼が俺を都市の中まで投げ入れそのまま俺がお前達を口寄せして都市を攻め落とすという寸法だ」

「……………おおおおおお！！！！……………」

「じゃあこの作戦は河童たちが全ての道具を用意してくれる三日後に決行する！！」

「うおおおおお！三日後が待ち遠しいぜええええええ！」

という声や

「ヒャッハー！下準備だア！」

という声も

「三日後までに全ての用意を済ませるよ！お前達！」

という声も聞こえてきた。

「じゃあな！」

「これにて解散！」

「「「「「おおー！」「」「」

俺も三日後に備えるか…

下準備（後書き）

次回は都市に主人公達を侵入させる予定です。

妖怪VS人間（前書き）

投下します

妖怪VS人間

今俺は都市の近くの森の中に名も知らぬ鬼とともにいる。
まあ当たり前だが都市への侵入をするためだ。

はあ…この戦いどっちが勝つことやら…

個人的には妖怪たちに勝ってほしいけどなあ…

でも全滅させてしまった場合別の場所で見つけないと畏れが
なくなるしなあ…

はあ…

「さて…そろそろ行くぞ。」

「わかってるいつでもOkだ」

俺がそういうと鬼は俺を抱えて思いっきり投げた。

…鬼の力ってすごいね…

すごい勢いで都市まで飛んで行ってるんだが…

あ…入れた。

俺は都市のほとんど人もいないようなところに落ちた。
まあちゃんと着地は成功したよ？

そして、俺はすばやく印を結んだ。

「口寄せの術！」

「「「「うおおおおお！！！」「」「」

なんかかつこいいな…これ

「どうやら成功したようだな…」

「今頃都市のほうでは侵入者は一人だと思い込んでいることだろう」

（監視塔）

どうやらまた懲りずに妖怪が来たようだ。

だが今度は一匹だけだという報告が来ている。

どういうことなのか…命知らずかはたまた一匹だけならはれないとでも思ったのか…

そういえば今日は娘の誕生日だった。帰ったらちゃんと祝ってやらないとな。プレゼントは何がいいだろう…

「何！？報告では一匹だけではなかったのか！？」

「そ、それが…」

「妖怪と戦って生き残っていた兵士によると一匹どころか妖怪の大軍勢がいたそうです。」

「くっ…」

「どうするんだ！もう捨て駒はいないぞ！？」

「いやまて…ひとつだけ方法がある」

「なんだ？」

「かねてより計画されていた月に移民する計画を実行にうつそう」

「正気か！？」

「失敗すればただではすまされんぞ！」

「我々の命はどうなる！」

「生き残っている住民をかき集めて全員で月に行くんだ！」

「しかし、それでは嗅ぎつけられるのでは！？」

「…兵士にはすまないが…足止めは全兵士にしてもらおう！」

「いいだろう」

「それならいける！」

次々と賛同の声があがった。

………

「終了」

「主人公」

「水遁・水牙弾！」

…次から次へと死んでいく…妖怪が…人間が…

この戦いによって散っていく…

「水遁・水衝波！」

その威力は凄まじく一瞬で兵士たちを飲み込んでいき辺りに建っている建物を粉々に砕いた。

「死ねえええ！この化物共おおおお！」

「た、たすけ…てく…れ」

「こんなところで死ぬわけにはいかんだ！」

様々な声が聞こえてきた。

それは人間たちの声だが妖怪たちも同じことを思っているだろう。俺だってこんなところでは死ねん。

ゴオオオオオオオ

なんの音だ？

俺がその音のした方を見るとロケットのようなものが飛んで行った。
あいつら…自分達だけ脱出するつもりか…

だが今は目の前のことに専念すべきときだ。
いちいちあんなものにかまっている暇はない。

俺は大量に飛んできた弾丸を奥義で全て返した。

「風遁・神嵐！」

それは兵士達をゴミのように吹き飛ばした。

そして、壁に激突し死ぬものや仲間の武器によって死んだものや弾幕に巻き込まれてもはやただの肉の塊と化してしまったものもいた。

次第に双方とも消耗していき残るは目の前にいる少しの人間とそれを取り囲む随分と数の減ってしまった妖怪だけだった。

なんだろうか…嫌な予感がする。

「やっと…この戦いも終わるんだ！」

そう妖怪の一人が言った時だった。

空から何かが降ってくる音がして空を見るとひとつの球体が降ってきた。

俺はあわてて警告しようとしたが時すでに遅し。

「神羅天征！」

…俺だけはなんとか生き残ることはできた。

だが俺以外は全て全滅してしまった…だがまだこの戦いは終わってなどいない。

どこに隠れていたのか次から次へと兵士がでてきて俺を取り囲んだ。俺はゆっくりと空に上がっていった。

もちろんあれをするためだ。

もう気をつける必要もない…仲間なんてもうここには一人もいない。残ったのは洞窟にいる河童と怪我をした妖怪、医者だけだ。

「世界に痛みを…」

そのとき人々は見た。

恐ろしくも神々しい神の姿を…

『神羅天征』

そして、一瞬でその都市は崩壊した。

妖怪VS人間（後書き）

もう主人公に残されたものはほとんどありません

写輪眼と万華鏡写輪眼の力（前書き）

投下します

写輪眼と万華鏡写輪眼の力

虚しいな…

俺は今崩壊した都市を見下ろしている。

そこにはただ巨大なクレーターと都市の残骸しか残っていないかった。

「帰るか…」

俺はゆっくりと歩いて帰ることにした。

〽数日後〽

「…おかえり」

「ただいま…」

「聞いたよ…全滅したんだってね…」

「ああ、もう何も残されてはいない」

「結局お互いにつぶし合っただけ…か」

「これからどうするつもりだい？」

「ああ…これからは各地を放浪してまわることにした」

「そうかい…どのくらいここにいるつもりだい？」

「ふむ…明日の朝一番にここをでるつもりだ」

「それはまた…随分と急だね」

「今回のことで俺にはまだまだ力が足りないことに気づいたからな…」

「じゃあ今夜はゆっくりしていきなよ」

「そうさせてもらおう」

「はあ…」

今俺は風呂に入っている。

ほとんど何も残されていないな…

もう考えるのはやめよう…

余計に鬱になる。

そして俺は風呂からあがり鏡を見て驚いた。

目が写輪眼になっていたのだ。

そして、次に写輪眼とは違う目になりいつもの輪廻眼に戻った。

…どうということだ？

そして、俺はゆっくりと考えた。

そういえば十尾の目も輪廻眼と写輪眼が組み合わさったような感じだったな…

何か関係があるのか…

他にもうちは一族に伝わる石碑は写輪眼、万華鏡写輪眼、輪廻眼の順に解読できるんだったな…

ということは…一種の仮説として輪廻眼は元々写輪眼だった？でなければ説明がつかない。

うーん…とりあえずもう一度イメージしてみるか…

「お」

すると発動した。

今度は万華鏡写輪眼を…

ちなみに俺の万華鏡写輪眼はうちはサスケのそれとそっくりだった。はあ…これってまさか天照とか月読とか使えたりするのか？

ていうかさっきの仮説通りだと使えるってことになるよな…
やってみるか…

「天照！」

叫ぶ必要は特になかったが初体験だし…
すると目の前の鏡が黒い炎を帯びて燃えた。

「どうしたんだい！？」

「…いや、なんか試したただけだけど？」

「？」

「まあ細かいことはいいじゃないか」

「？…まあいいけど」

「それはそうとなんか知らない人間いないか？」

実は河童たちはたまに人体実験をするのだ。

あの黒いバールのようなものときも試したっていったし…

「必要なのかい？」

「まあな」

「何に使うかは知らないけど…ほどほどにしときなよ？」

「わかってる」

そして、俺は地下に行きさっそく月読を試してみた。

すると、悲鳴を上げてピクリともしなくなった。

しかも、今気づいたことだが目から血がでていない。

万華鏡写輪眼ってたしか使えば使うほど失明に近付いて使うたびに眼から血がでてなかったか？

…細かいことは気にするなってか…まあ、得をしたんだし別にいいか。

死体処理のために神威も使えるか試したところ…使えた。

…全てが終わった後にこの力が手に入るなんて…とんだ皮肉だな。
もしあのときこの力があつたならあの悲劇を防ぐこともできただろうに…

他にはたしか須佐能乎もあつたよな…

イメージしてみると巨大な人型の骨のようなものが出現し最後に体

をよくわからないもので覆って完成した。

しかも腕が四本でそれぞれの腕に霊器を持っていた。
なにこれチートすぎ。

これほぼ無敵に近いぞ…

いろいろと疲れたし

そろそろ寝るかな…

俺は地下からでると自分の部屋にいきそのまま眠りについた。

写輪眼と万華鏡写輪眼の力（後書き）

主人公は輪廻眼と写輪眼の関係について知らない設定です。ただ写輪眼、万華鏡写輪眼、永遠の万華鏡写輪眼があるということと使い方は知っています。

仙人は旅にでるようです（前書き）

新しい章のはじまりですね！

仙人は旅にできるようです

俺は今、河童たちに見送られている。

「またいつでもおいでよ！」

「達者でな！」

「いつまでも待ってるぞ！」

様々な声が聞こえてくる。
少し感動してきたな…

すると河童の中から特に親しかった医者イサナの河童が出てきて

「これ少ないけど…」

と言って渡してきたのは包まれた三つのおにぎりおにぎりと一振りの刀ヤマトだった。

「これは？」

「これは私が握ったので…こっちの刀は私達全員で力を合わせて作った最高傑作だよ！」

あかん…今ならムスカの気持ちができるわ…
目から何かがでそうだ…

「最後の最後でお前達…お前達も達者で暮らせよ！」

「「「「「いつでも帰ってこいよー！」」「」「」

「ああ！またな！」

こんな俺でも…うるうる…
いかん…目から地爆天星が…

俺はそのまま後ろに手を振りながら歩いて離れて行った。

「数時間後」

腹減った…

そうだ…おにぎりでも喰うか…

俺はすぐ近くにポツンとあった岩に座ると包みをといて食べた。

いやーいいねえ…
思い出しただけで…うるうる…

うーん…森や川も綺麗だしやっぱ自然はいいね！

そして、俺はその場から急いで離れ落下物を避けた。

「？」

それは見ると人の形をした何かだったがどこか懐かしい感じがした。

「いててて…あの馬鹿神め…」

「何だ？お前」

そんなことを考えているといきなり質問された

「何だといわれてもな…」

「ちょwその眼はw」

「この目がどうかしたのか？」

「それ輪廻眼だろ？」

「そうだが？」

「ってことはお前も同じ転生者か？」

「…どういうことだ？」

「俺の名前は工藤巧って言っただけだな？」

「！？」

「間違っただけ死にまっただから転生させてくれるって言われてさあ…」

「お前…今何と言った？」

「間違っただけ死にそれより前だ」俺の名前は工藤巧「お前本当にそれが名前なんだな！？」

「それがどうかしたのかよ？」

「お前の通っていた学校は。。。中学校だろう？」

「何でお前がそれを知っているんだ？」

「俺はその名前の人物を知っている」

そう俺はこいつとまったく同じ名前の幼馴染がいるのだ。
しかもこいつは今何で知っているんだ？と言った。
ほぼ確定的だな…

「じゃあお前は…」

「いいか？いまからある言葉を言っぞ？」

「ある言葉？」

「俺が一時期お前にもものすごくオススメしていたゲームだ」

俺は昔こいつにかなりしつこくオススメしていたゲームがある。
そのゲームは…

「せーの！」

「「オブリ。オン」」

「「ヒヤッハー！」」

「ところでお前…神とか言っていたな？」

「ん？あの馬鹿神ね」

「そいつはお前に何かくれたのか？」

「ん？まあな」

「何だ？」

「すべてのポ。モンの力だな」

「それはまた便利だな…」

「だろ？」

「あんなことやこんなことが…クククク…」

「能力名としてはあらゆる奇獣の力を操る程度の能力ってところかな」

「むむむ」

「何がむむむだ！」

「あいかわらず面倒なやつだな…」

「それで？おにゃのこはどこかな？」

「おいやめろ」

「あと聞かされていなかったのか？ここはおそらく太古の時代だぞ

「？」

「な…なんですとー！？」

「はあ…」

やっぱり聞かされていなかったのか…

こいつは俺の幼馴染だ性格は把握している。

こいつなら幻想郷のある時代に飛んでいたはずだ。

「なら時間を操って未来に行けばいいんじゃないか？」

「そんなんじゃないじゃマイカ！」

「どっちだよ…」

「まあいい…それじゃさっそく太古の時代とやらを満喫させてもらうとしますか！」

「ところで」

「何だ？」

「こいつてどこ？」

「まずはそこから…」

「ここは月の民が月へ移民した直後の時代だ」

「ちょうどここから十キロほどいったところに未来都市の残骸がある」

「残骸？」

「…」

こいつはなんとなく察してくれたようでこれ以上は聞いてこなかった。

こいつはこんなふうがいいところもちゃんとあるやつだ。
まあ…たまに息をするように嘘をつくけどな！

「で？これからどうするんだ？」

「俺はこれから各地を放浪してまわるつもりだが…」

「お前は？」

「俺は…お前についていくのぜ！」

「…頼もしいな」

「じゃあ改めて出発だ！」

「おう！」

仙人は旅にできるようです（後書き）

まさかの新キャラ登場！

本当は嘘をつく程度の能力とか考えてたんですけどね…球磨川の能力に近いが違うところは…すべてを生み出しすべてを消しさる全能の力だということです。

他にもありとあらゆるものを召喚し使役する程度の能力とか…

自然を操る程度の能力とか…

どれかひとつでも持っていれば世界を滅ぼしかねない能力ですけどね…

あなたならどうしますか？（前書き）

投下します

あなたならどうしますか？

あれからかなりの月日が流れた…

今俺達はある山にいる。

なんだか知らないが急に巧…じゃなかった匠が山に登ろうと言いだしたのだ。

まったく…こんな山登って何になるんだ…

あと匠ってのは幼馴染が改名した名前だ。

「おいイ？顔にでてるぞ？」

どうやら考えていたことが顔にでていたようだ。
そうして登っているうちにやっと頂上についた。
匠はちょうど突き出している岩に乗ると

「フタエノキワミ、アッー！」

と大声で叫んだ。

「何しとんねん！」

俺が突っ込むと

「いや、だってこんな時代じゃないと思いつきり叫べないだろ？」

「それはそうだが…」

だいたい時代がどうかそれ以前の問題な気がするの俺だけか？

「はあ…」

俺がため息をついていると急に目の前の空間が割れた。

「うん？」

俺は疑問の声をあげただけだが

匠のほうは何かを期待するような目でその割れ目を見ている。

すると…

「はじめまして」

という声とともに中からあきらかに場違いな…というより時代にあ
っていない服装の少女が現れた。
どこかで見たような…

「ヒヤッハー！美少女だー！」

「やめい！」

「…」

歓声を上げる匠とそれを止める俺、そしてその様子を割れ目から上半身だけだしてポカーンとした様子で見ている少女。

「シュールだ…」

「で？何のようだ美少女」

「悪いけどあなたたちには能力の実験台になってもらっわ…」

という声とともに俺達の足元に割れ目ができる。
なんだか割れ目って卑…ゲフンゲフン

「…だが断る！」

俺は神威で匠はおそらく空間を操ったのだろう。
それぞれ現れた割れ目を消した。

「なっ!？」

よほど能力に自信があったのだろう。
かなり驚いていた。

「さうて…ちょーっとお話しようか？」

「い、いやあああああああ!!」

その日、とある山にて一人の少女の絶叫が響き渡ったという。

「ゆ、ゆるひてえ…」

今俺達の目の前には放心状態で目からは涙を流しだらしくあいた口からは涎をたれながしたまま死んだ魚のような目をした少女がいる。

まあ、何をしたのかというと月読を使って72時間刀で刺され続ける幻を見せたり…魔幻・奈落見の術をかけたりした。
そうしたらこんな状態になってしまったというわけだ。

こんな状態にしておいて何だが精神が元に戻るまでちょっとの間面倒を見ることにした。

まあ、一生もののトラウマだろうけどな…

それに面倒をみるとは言っても本当にちょっとだけなのでちょっと寝かせてすぐに出て行ってもらうつもりだ。

鬼畜だな…

まあ、もとはと言えば仕掛けてきたのはこの少女なんだし…

その後俺達はその少女を連れて山を下り俺が木遁で作り出した家に行った。

今俺達の目の前には寝ている少女とそれを危ない目で見ている匠、そしてその様子を見はっている俺とかなり困った状況になっている。

「フヒヒ…」

「おい、完全に危ない人になっているぞ」

「まさかとは思つが…そんな少女を襲うつもりじゃないかな?」

「フヒヒ…」

だめだコイツ…早く何とかしないと…

「ヒヤッハー!」

と言ってルパンダイブしようとしたので腹にパンチを食らわせて吹き飛んだところを>ちなみに俺は金剛力を持っているので滅茶苦茶

力が強い<痛天脚で止めを刺した。

最初のパンチで山を貫通し1000mほど吹き飛び痛天脚で大地が真つ二つになり匠はそのまま地面に思いっきりめり込んでいる。それでもピクピクと動いているのでその生命力の高さに驚かせられる。

「まったく…」

俺が戻ると少女は未だに寝ていた。
どうしたものか…

あなたならどうしますか？（後書き）

どうでしたでしょうか？

いまさらですが主人公の見た目は黒髪、目は輪廻目で人によってはイケメン、人によっては普通という感じです。まあ至って普通ですね。

常に無表情なのが特徴です。

匠は碧色の髪に碧色の目のイケメンですね。

まあ名前と容姿に関してはマイ。クラフトをたまたま見ていたのでこうなりました。

この少女はおわかりでしょうか…紫です。

ですが生まれたばかりの紫という設定です。

今回は過去の戦いを書こうと思います。

言えない…実は入れるのを忘れててこの話を投稿したあとに気づいたなんて言えない…Orz

親方！空から十尾が！（前書き）

投下します。本当なら前回の前に何話が入る予定だったのですが……すっかり忘れていたので過去の話が何話が続きます。前回の前回から数年ほどしか時間が経っていません。今回は主人公強化イベントですね。

過去話は何話が続いてその中に主人公強化イベントが混じってる感じですよ。

親方！空から十尾が！

今日も平和だなあ…

今日も空が晴れていてとても平和と感じた。
あれが空から降ってくるまでは…

「なあ…ところで今どこらへんだと思う？」

「さあな…」

この世界で生前の地図が通用するのかわわれれば自信がない。
ましてや今はかなり大昔の時代だ。

何がどこにあるかなんてわからない。

今、俺達は太陽の光が降り注ぐなか歩いている。

どこを見ても山、山、山…山ばかりだ。

今は山と山の間にある道（笑）を通っている。

「はあ…」

「何かこうあつ！と驚くようなことはないのか…」

そんなことを言われてもな…

俺は芸人じゃないしあつ！と驚くようなことなんてできない。

>天の声：いやいや地爆天星とか神羅天征とかあるだろ。忍術の火遁とかまさに一発げ「豪火滅却！」ぎゃあああああ…<

「今何か聞こえたような…」

「おいおい暑さで頭がおかしくなっ たんじゃないだろうな？」

今の声は気のせいだったのか…

これは本当に頭がやられてきてるかもしれないな…

「はあ… 空から女の子でも降ってこないかなあ…」

「あつ！親方！空から女の子が！」

なんてくだらない冗談を言ってみる。
匠を見てみると空を凝視していた。

「おいおい冗談だって… まさか本気に…」

いくら話しかけても空を見たまま動かないのでぶん殴って引きづって行こうかと考え始めたときだ。
いくらなんでもおかしいので俺も空を見てみることにした。

すると空に小さい点のようなものが見えた。
それはどんどん大きくなっていきしまいに俺達を押しつぶさんばかりの巨大さになって…

「うおおおお！？」

俺は正直パニック状態だったが慌てて神羅天征を発動させた。
すると空から降ってきた物体を弾き飛ばした。

その奇妙な物体はもそもそと動き尻尾が生えた。
なんだかどこかで見たことのあるような…

尻尾は十本生えていて…何とも言い難い姿をしていた。

…ただ一つ言えることは間違いなくあれは恐怖の権化であるということだ。

それに俺に似た力を感じた。

匠のほうはというと

「あれって…十尾のシルエットにそっくりなんだが？」

とか言っていた。>天の声：これはあくまで自分の妄想なので実際の十尾がどんな姿をしているのかは知りません。なのであえて姿を書きませんでした。<

「十尾…」

どこかで見たことがあると思ったならそういうことか…
しかし何であんなものがこの世界に…

どちらにしろあれを倒さなければ今までの生活はもうできないだろう。

というより冗談抜きでやヴぁい力を感じる。

「おい」

「何だ？」

「どうするっ？」

「どうするって…そりゃお前、封印するしかねえだろ」

「ですよー」

とは言ったものの…マジでどうするんだコレ…

するとその化け物は俺達を見つけたらしく凄まじい雄叫びを上げ突進してきた。

というより本当に化け物だなコイツ。

雄叫びだけで近くにあった山が吹き飛んだぞ。

俺は須佐能乎を発動させ身を守り匠はよくわからないバリアのよう

なものを張っていた。

てかこの化け物…とんでもない馬鹿力だな。
須佐能乎がどんどん押されている。

その化け物は

いきなり須佐能乎の両腕をつかむと顔をかなり近くまでよせ何かを溜め始めた。

何か嫌な予感が…

するといきなり化け物の頭が横に思いっきりそれた。

と思ったと同時に今まで溜めこんでいたそれが放出され化け物の眼前にあつたものが消し飛んだ。

俺は今がチャンスとばかりに須佐能乎を動かし思いっきり化け物の腕を叩き斬った。

化け物は凄まじい叫び声を発したが俺はおかまいなしに天照を発動。化け物はたまらず地面をのたうちまわっていたが俺をその恐ろしい眼で睨みつけ俺に飛びかかってきた。

「どいつもこいつも俺のことを忘れちゃいねえか!？」

すっかり忘れていたがおそらくさっき化け物の頭を逸らしてくれたのは匠だろう。

そして、化け物VS怪物（人の形をした何か）の戦いがはじまった。

まず最初にあいつは化け物の周りをぐるぐる飛び回っていたが化け物に捕まってしまうそのまま潰されてしまうかと思ったところでは

きなり口から凄まじいエネルギーを発射し化け物の顔面に直撃させた。

そして、化け物が顔を押さえているところを顎を蹴りつけ体当たりをした。

だが、当然ただの体当たりではない。

よくはわからないが何かを纏っていたらしく凄まじい勢いで化けものは吹き飛んでいき数キロも吹き飛んだところでやっと止まった。化け物を見ると腹から血が噴き出していた。

あんな攻撃をする匠もすごいがあんな攻撃を受けて血を出すだけで済む化け物もすごい。

だがかなりあいたと思われるこの距離を利用して化け物はまたあれを…あれはなんだったか…び…び…そうだ！尾獣玉だ！

その尾獣玉を溜めそして、発射した。

当然俺は盾で防ぎ、匠は化け物の後ろにレポートしていた。

そして、またあの謎の体当たりをして化け物がこちらに吹き飛んできた。

俺は飛んでくる勢いを利用して剣を突き刺そうとしたがあいつは信じられないことに空中で体勢を整え俺の剣を微妙に身をよじり避けた。

なんてやつだ…

まさかこいつ…人間並みの知能を持っていたりするか？

だが一時はどうなるかと思った戦いも匠の撃ったエネルギーを極限までためた超極太の光線が化け物に直撃し俺がそのすきに剣を突き刺し封印したことで終わった。

だが、この化け物は封印されながらも抵抗していたのでかなりびびった。

本当に封印から抜け出しかけたこともあったのだ。

まったくそれにしても…この化け物…どうしよう…

親方！空から十尾が！（後書き）

どうでしたでしょうか？

次回はまた違う過去の話です。

ていうか今気づきましたがああ、あの弓が全然活躍していないという…

まあ、個人的な意見ですが、化け物と怪物の戦いなんて案外あつけないものだと思いますよ？

十尾の残り滓（前書き）

今日は登山してきたんですが…フラグのバーゲンセール状態でしたw
登るときに十本。帰るときに二十本近くフラグが立ちました。
主に死亡フラグでしたけどねw

自分はあるてフラグをたてつつそのフラグをへし折りましたw
帽子がなければ即死だった…

タグがつくとすれば

「レジワロス」

「ブロンティスト」

「危険が危ない」

「親方！空から男の子が！」

「その石で私と勝負するつもりかね」

「パルス！」

「あれが後のラピュタだ」

「もうやめて！とつくに足のライフはゼロよ！」

「見る！人がゴミのようだ！」

「死亡フラグのバーゲンセール」

「帽子がなければ即死だった…」

「まずは落ち着け。話はそれからだ。」

とかですかね w

十尾の残り滓

まったく…あれから散々な目にあつた。

十尾を俺に封印するときだが十尾は最後まで抵抗した。

それと十尾と戦ったときに十尾が発した邪悪なチャクラが少し漂っている状態なのだ。

もしあれが妖怪なんかに形を変えたらどうなるか…

はあ…

もちろん封印は成功し俺はさらなる力を手に入れることができた。これって完全に六道仙人だよな…

今は十尾と戦ったところに向かっている。

「嫌だなあ…行きたくないなあ…」

「そんなことを言つなよ」

こいつはずつとこんな調子で行きたくないと言っている。なんだか嫌な予感がするようだ。

「…」

「…」

何かいた。

黒いアイツとしかいいようがないな。

いや…別にGとかではない。

ただ本当に黒い。

どんなやつかというのと千と千。の神隠しに登場した。なしのような
かんじだ。

するとこつちを見た。

「こつち見んな」

「■■■■!?!」

するとわけのわからない言葉を発しながら>というかあれが言葉な
のかどうかすら疑わしいが<こちらに突進してきた。
しかも滅茶苦茶速い。

匠は

「こつちくんな!」

と言いながら逃げて行った。

「…」

「……」

残ったのは俺と。なしだけだ。

これからは黒いアイツと呼ぶことにしよう。

はつきり言ってこんなやつを相手にしたくない。

というより触れただけでアウトな気がするのは俺だけか？

しばらく俺と黒いアイツとで見つめ合うというシニールな時間が続いた。

黒いアイツが俺に突進しようとした瞬間、空から隕石が降ってきた。そして、それは見事に黒いアイツに命中し黒いアイツは悲鳴を上げた。

「■ ■ ■ ! !」

何か言っているようだがまったくわからない。

というよりわかりたくないな。

おそらくさっきの隕石は匠の仕業だろう。

とりあえず汚物は消毒するにした。

もちろん天照だ。

さっきからわけのわからない奇声を発しているが同情できないのはあいつが獣のように襲い食らうことしか能の無い生物のように見えるからだろう。

俺は妖怪が大好きだ。
俺は妖怪が大好きだ。

大事なことなので二回言った。

だが、俺が好きなのはあくまで普通に接することのできる妖怪であり獣のように理性がない妖怪は好きではない。
むしろ他の妖怪にも迷惑がかかるだろう。

そんなことを考えているとあいつはいつのまにか体勢を立て直しさつきまではのたうちまわっていたがこちらを見ている。
そして、また突進してきた。別に相手をする必要もないのでこのまま天照で燃え尽きるまで逃げ回ることにした。

だがさつきも言ったように黒いアイツは滅茶苦茶速いうえに生命力がまさにG並みだった。
俺はかなりの速度で走っているにもかかわらず黒いアイツはどんどん距離を縮めてきた。

まったく…それにしても匠はどこまで逃げたのだろうか。
まったく感じられないのだが…

俺はまた走る速度を上げた。
すると黒いアイツも速度をあげた。
…もしかしてこれってどんどん強くなってる？
どうしてこうなった…

俺は猛スピードで走っているが黒いアイツとの距離はどんどん縮ま
っている。

「
■ ■ ■ ! ! !」

また何か言っているようだ。

というかアイツおかしいだろ。

天照で燃やされながら追ってくるとか…

考えても見てほしい。

。なしが四足歩行で猛スピードで泥のようにぐちゃぐちゃな身体を
揺らしながら迫ってくる様を…

考えただけでゾッとする。

いつまでも逃げていても埒が明かないと思った俺はそのまま空に上
がり神羅天征で押し潰すことにした。

「神羅天征」

すると凄まじい勢いでクレーターは広がっていった。

「やったか…」

なんかフラグを建てた気もするが…
するといきなり頭を掴まれた。
黒いアイツだった…

「馬鹿な！神羅天征に耐えるだど！？」
もちろんまだまだ本気ではないのだが…

俺はそいつの手を掴むと顔面を殴った。

そいつは奇声をあげて後退したがすぐに俺に掴みかかってきてそのまま投げ飛ばされた。

投げ飛ばされた俺は凄まじい勢いで吹き飛んでいき岩の壁に激突し、その衝撃で岩が崩れ俺は下敷きになった。

まさかあれまで使うことになるとはな…

「地爆天星」

黒いアイツは口から泥の塊のようなものを吐き出してきたが俺はそれを跳ね返した。

すると黒いアイツは吹き飛んでいき俺はそのすきに黒いアイツを岩で団子状態にした。

今ではこの程度の大きさなら簡単に作れる。

そして、黒いアイツも地爆天星に巻き込まれた。
今度こそ終わったな。
すると

「いやゝおつかれゝ」

と匠がどこに隠れていたのかでてきた。

「お前は何もしていないだろう！」

そうだ。こいつは何もしていない。

「最初に隕石をぶつけたじゃまいか」

「それだけだろう！」

「細かいことは気にするな（キリッ）」

匠はキリッとした顔で言った。
むかつく…

「何がキリッだ！」

俺は空に浮かんでいた地爆天星をそのまま匠に落とした。

十尾の残り滓（後書き）

どうでしたでしょうか？

なんだかパクリな気もしますが気のせいですよ？
気のせいですよ？

大事な事なので二回言いました。

愚か者（前書き）

投下します

愚か者

「起きろ―」

俺が寝ているとそんな声が聞こえてきた。

「…あと五分…」

とりあえず適当に返事をすることにした。
だが当然、匠にそんなことが通用するはずもなく。

「はあっ！」

「ぐへっ!？」

いきなり腹に衝撃がきて変な声がでてしまった。

「…殺す気か！」

「ちっ」

舌打ちしやがったこの野郎…

「あらぶる匠のポーズ！」

匠を見るとすごく…シユールです…といったくなるようなポーズをとっていた。

嫌な予感がするんだが？

「だ・い・ば・く・は・つ」

「…」

その瞬間大爆発が起きた。

まさに大爆発。

一瞬で洞窟は消し飛び周囲にあったものを飲み込んだ。

「どうしてこうなった…」

周囲を見てみると見渡す限り焼け野原。
何も残っていなかった。

「ヒャッハー！」

だいたいコイツのせい

「はあ…」

とは言っても俺のせいでもある。
はあ…

一方、月では議会が開かれていた…

く月く

「あいつらは駆逐するべきだ！」

「馬鹿な！忘れたか？奴の力で都市は一瞬で崩壊したんだぞ！」

「今はあのとき以上の技術がある！」

「無理だ！無理に決まってる！」

御覧の通りの有様である。

「おやめなさい」

「しかし！」

「二度目はありません」

「…」

「しかし月夜見様…」

しかしこの月の都の王である月夜見の登場によって議会は落ち着きを取り戻した。

「私達にはあのときとは比べ物にならないほどの力があります。何を取り乱すことがあるのです」

「しかし、相手はあの六道仙人と名乗る化け物ですぞ！」

「しかも匠とやらは地上を監視している監視者と目を合わせるとい

う離れ業をしたと聞いたが…」

「そして、我々を一番驚愕させたのが…」

「十本の尻尾の生えた化け物の消滅…」

このとおり主人公達を監視していたのだ。

そして、十尾を倒した主人公達にたいして驚愕した。

しかも匠に至っては監視者ともモニターを通して目を合わせたりしていた。

主人公も気づいてはいたがあえて無視をしていた。

それだけ今の主人公達にとっては月の民などどうでもいい存在なのである。

「そうですね。…しかし倒せないこともないでしょう。」

「まさか…アレを使う気では…」

「アレを使う以外にあの者達を倒す方法などないでしょう」

アレというのは破壊爆弾で破壊のみを目的とした現時点での月の都で最も破壊力のある爆弾である。

その威力は地表に存在するものを全て一掃してしまうほどである。

「では採決を…」

「私は賛成だ」

「私も」

「私もだ」

と続々とこのことに賛成する者がでた。

というよりこうする以外にどうすればいいのかわからなかったのだ。そうして主人公達のいる地表に向けて爆弾が投下されることが決定した。

「終了」

「六道仙人」

まったく…

あれはなんだ？

そのとき仙人の目には球体が空から降ってくる光景が映っていた。

「あれは…」

匠も気がついたようでアレを見つめている。

「爆弾だな…」

どうやって判断したのかはわからないがどうやら爆弾のようだ。
犯人はおそらく…月の民だろう。
あいつら以外思いつかないしな。

「じゃあ…」

「ああ、送り返しとくか」

「いや…俺がいくぜ！」

匠はそう言つと空を飛び爆弾を回収するどこかに消えた。

く匠く

まったく…あいつらも懲りない奴らだなあ
監視するだけなら見逃してやったのに…
ちなみに今は月の都にいる。

まあ返却するためだ。

ゴミは自分たちで処理しろってな

「はじめまして」

「うわっ何だお前は！」

「匠だ！匠がでたぞー！」

「落ち着け！」

「それは何だ…爆弾だー！」

「落ち着きなさい！」

「へえ…あんたがねえ…そんなもので姿を隠す必要なんてねえだろ」

「…」

「何のようで…」とぼけてんじゃねえよ」「

「殺されてえのか？」

「監視するだけではあきたらず爆弾投下なんてなあ…」

「できればその爆弾を外にだして欲しいのですが…」

ちなみにこの場合の外とは月から離れた宇宙空間のことである。

「すんませ〜ん、無→理←」

「じゃあここに置いてくからあとは自分たちで何とかしてくれよ」

そうして匠は月から去った。

「誰か！」

「爆弾処理班を！」

「急げ！」

「終了」

「六道仙人」

どうやら帰ってきたようだ。

「どうだった？」

「ちゃんと置いてきたぜ」

「そうか」

はあ
…

なんだかなあ
…

愚か者（後書き）

次回からは過去ではなくちゃんと時間が進み始めます

傲慢（前書き）

投下します

傲慢

「暇だな」

「暇すぎる…」

今俺達は野原にいる。

もう…うん、草が生え放題、伸び放題で大変なんだよ。
飛べばいいんだが…なんだかなあ…

とりあえず当てもなく適当に歩いているだけだ。

そのうち何とかなるだろうということだ…

最近はずんずんと神々がもめているらしい。

何でも大和の神々がほかの神々の領地を侵略しようとしているらしい。

俺ははっきり言うと漁夫の利を狙っている妖怪たちの方が心配だ。

「あれは…」

そんなことを考えていると集落のようなものが見えてきた。
すぐく…古いです…

「ふむ…」

誰かは知らないが何者かの力を感じる。

神の持つ力は他の力を遥かにしのぐほど強力だ。

別に悪いことをしにきたわけではないので普通に入ることにした。

その際になぜか匠が危ない目をしていたのは気のせいだったのだろうか…

しばらく歩いていると大きな建物がありちょうど数人ほどの集団がその中に入っていくところだった。

「ついていてみようぜ」

「しかし…」

「別に罰が当たるわけでもないし」

「いや、あたるだろ」

「細かいことは気にするなっ」

結局見に行くことになった。

はあ…

俺は押しに弱いんだ。

昔は何をしても弱そうだと言われたものだ…

「……の生贄……でっ…います」

生贄という何とも物騒な言葉が聞こえてきた。

そのまましばらく待っているとさっきの集団はでていった。

「さっさとでてきたらどうだい？」

「ほう…」

「…」

「まずはさすが神だと褒めておこつ」

「あんたみたいなのに褒められても嬉しくとも何ともないよ」

「ふん」

なでなで…

「!？」

匠はと言うと気がつくといつのまにか諏訪の神を膝に乗せた状態で頭を撫でていた。

神のほうはじたばたと抵抗していたがたいして嫌がっていないように見えるのは俺の目がおかしいからだろうか…

「離せ」

「だが断る」

「知ってるか？」

「？」

「とある神士は言った」

「ロリコンが幼女を愛でるのではない。幼女を愛でるのがロリコンなのだ」

つまりこの変態は何が言いたいんだ…

「まあ頭の片隅にでも置いておけ」

「ところであんたたち妖怪じゃないのかい？」

「俺達が妖怪？」

「どこをどう見たらそうなるんだ？」

「うーん、そうだね…」

「お前はいい加減その手をどけたらどうだ？」

というとなぜか神のほうに先に反応しわずかにこちらを睨んだ気がした。

どうなっているんだ…

「ところで噂で戦争が起きると聞いたのだが…」

「ああ、大和の神がね…」

「ということは…」

「協力してくれるのかい？」

すると匠が

「俺は協力するつもりだけど…お前はどうするんだ？」
と言ってきた。

「俺はどちらにも協力するつもりはない」

「じゃあ中立ってか？」

「まあそつなるな。俺は参戦せずにのんびり眺めさせてもらつとしよう」

俺は戦争なんぞ好きではない。

まあ、参戦するのは嫌いだが見るのは嫌いではない。
それに何と言つても歴史に名を残す神々の戦いだからな。
見ても損をすることはないだろう。

そして、俺はそのまま建物をでた。

（数日後）

今俺は匠と話している。

何を話しているのかと言うと

なぜか大和の神々と話し合ってきてほしいと言われたそうだ。

まあ、ようするに交渉だが…悪く言えばパシリだな。

俺も同行することにした。

まあ、中立とはいってもただ単に観戦するだけじゃつまらないしな。

それに諏訪の神とも会っているんだし別に直接会いに行っても問題はないだろう。

しかし、何だろうか…すごく嫌な予感がする。

そもそも神というのは強大な存在である。

だがそうであるがゆえに傲慢な存在でもある。

だから心配なのだ。

もしかしたら話し合いにすらならないかもしれないし運が悪ければそのまま戦闘になるかもしれない。

どちらにしろ碌な事にならないのはたしかだろう。

…いつのまにか目的地に着いていたようだ。

「すんませーん、誰かいませんかー？」

すると

「誰だ？」

中から一人の女性がでてきた。

「あ、どーも。諏訪の神に頼まれてきた使者ですけどー」

匠はさっきからなめた発言をしているが無視することにした。

「ああ、そういうことか。中に入れ」

そうして案内されること数分。

とある部屋の前に来た。

すごく…大きいです…

まあ部屋の入り口というかドアというか…

気にせず開けるとなんだかなあ…

あからさまに喧嘩腰な気がするんだが？

だつて殺氣ぶつけてきてるし…

他にも何人か神がいたがそのなかで若そうな奴が殺氣をぶつけてきていた。

匠のほうを見ると早くも顔がびくびくしていた。

仮にもこれは話し合い（笑）…交渉である。

手がすべつてうっかり偶然にも神を殺してしまうのを我慢しているのだろう。

他の神もそれにたいしてまったく注意していない。
こいつら本当に話し合う気があるのか？

「おい人間」

「生意気だぞ床に正座でもしてろ」

するとくすくすと笑い声が聞こえてきた。
匠の方を見ると

「（＃＾ω＾）…」

こんな感じだ。

あとひと押しで誰かが犠牲になるかもな

「それで？何の用だ？」

「ああ、実はだな…かくかくしかじかで…」

しばらく話し合って結論がでそうだといつときにあの若い神がとんでもない結論をだした。

その最中にも匠は

「（#^ω^）ビキビキ」
という状態だった。

「じゃあお前達が土地の四分の三を譲るといふのなら見逃してやつてもいい」

ぷちっ

そのとき何かが切れる音がした。

そう思った時にはすでに遅くその神は手足を切断されていた。

あまりに速かったためにしばらくは静かな時間が過ぎた。

そして、やっと頭がおいついたのか

「ぎゃあああああああああああ！…！」

と無様に悲鳴をあげた。

「豚のような悲鳴をあげる……！」

あと少しで死にそうだというときに俺はそいつを助けてやることにした。

見ると四肢は引きちぎられ腸を引きずり出された状態だった。まったくこんな状態でよく生きているなと感心した。

匠は

「おいおい、止めるなよ」
と言っていた。

他の神はと言つと

「何ということを……」

「惨い……」

と言っていた。

この程度で惨いとか言ったらまるでお話にならないな。

まったく…俺は適当に術を施してやるとそのまま帰った。

傲慢（後書き）

とりあえず次回は諏訪大戦になる予定です。今回はグロシーンが入ってましたね。

まあ、ほんのちよつとでしたが…

あと話の展開が少々強引な気もしますが気にしないでください

諏訪大戦（前書き）

投下します

諏訪大戦

まさに今、諏訪大戦がはじまろうとしているときに俺はとあるものを探していた。

まあ、妖怪なのだが…前にも言ったように俺は妖怪が好きだ。だから馬鹿なことはやめさせようとしているのだが…

士気が高すぎるというか何と言うか…とにかく俺が言ってどうになる状態ではなかった。

だから結界で行く手を阻むことにした。

そうでもしなければ全滅してしまうだろう。

だがどうも妖怪のいる場所が一か所だけではないらしいのだ。だから今は妖怪を探している。

「妖怪、妖怪、妖怪…」

と探しているといきなり柱のようなものが飛んできた。俺はそれを片手で止めると投げ返した。

「…あんたまさか妖怪を退治してくれるのかい？」

どうしてそうなった…いや、どうもそうは考えていないらしいな

「…それとも、妖怪の味方でもするつもりかい？」

まあばれたのは俺がさっきから戦場の隅っこで妖怪妖怪とぶつぶつ言いながら歩きまわっていたからだろっ。

「だったらどうする?」

「ここであんたを倒す!」

「やめておけ。諏訪の神との戦いもあるのだろっ。こんなところで消耗してもいいのか?」

「あんた程度の相手に消耗なんてしないよ」

まったく…俺はガキの子守は好きじゃないんだが…

「いいだろう…少しだけ遊んでやる」

「来い!」

俺は神の背後にまわった。

「なっ!？」

「だからやめておけと言ったのに…」

そのまま手刀で気絶させると神威で転送した。
俺はそこまで暇じゃないんでな…

さゝて妖怪妖怪…

「おいまて!」

はあ…

「今度は何だ？」

「お前は…」

見ると交渉の最中に殺気をぶつけてきていた神だった。

「貴様よくも…」

どうやらさっきの御遊びを見られていたようだ。

「お前も俺にやられにきたのか？」

適当に挑発しておくことにした。

こついうやつは安い挑発に乗りやすいんだよな…

「死ねえ！」

「…」

俺の体は貫かれた。

「なん…だと…」

俺は口から血を流し驚愕した様子でやつを見た。

俺もここまでか…

「…」

「思っていたのか？」

「え？」

「幻術だ」

俺は手刀でそいつの胸を貫いた。

「がはっ……」

「ふん、所詮はこの程度か……」

「とりあえず死んでおけ」

「た……たすけ」

「神が人間に願い事か？ククッ……」

「ぎゃあああああああ……！」

さて汚物の処理も済んだしさっさと済ませるか…

〈数十分後〉

なんだ…すぐ近くにいたんじゃないか

俺か神威で転送するのではなくなぜ結界で阻むのかと言つとどつせ普通に転送してもすぐに帰ってくるだろうからだ。

ちゃんと全員に術をかけて…と

これでいきなり帰ってくるなんてことにはならないだろう。目が覚めるのは少なくともこの戦が終わったころだろうな

用事も済んだしさっそく観戦しにいくか

…それにしても邪魔だな…

「風遁・大突破」

すると目の前が綺麗になった。

俺はゆっくりと歩いていくことにした。
もうこのあたりにはいないだろうし…

見つけた。

今まさに諏訪の神と大和の神との戦いがはじまろうとしていた。

だが…はじまらない。

まさかさっきの神が原因か？

さっきのというのはもちろん柱を飛ばしてきた神のことだ。

ふむ…ならもう少ししたら目が覚めるだろう。

だが本来なら俺はこんなところにいる場合ではない。

さっきの神にはつきりと顔を見られているからだ。

まあ、なんとかなるだろう。

その諏訪の神の隣に匠が立っていた。

今のままではあいつはそのうち地獄のような苦しみを味わうことになるだろうな…

世の中にはハーレムというものがあるらしいがあれは立ちまわり方次第では天国になるかもしれない。

だが一歩間違えればその先に待っている物はまさに地獄である。

南無南無…

「…」

見るとあの神は目が覚めたようだ。

はじまった。

この諏訪大戦はあの二人の神を中心に行っているようだ。

匠の方は遠くで戦っているが圧倒的だな。

だが諏訪の神はそうでもないようだ。

さつきからほぼ互角の戦いが続いている。

大和の神が柱を投げそれを諏訪の神がはじき返したり…の繰り返しだ。

正直言つて迫力はあるがおもしろくないな

さつきから流れ弾がこっちに飛んできて危ない。

まあ結界を張っているからいちいち動かなくていいんだけどな。

戦場のど真ん中でこんなことをしているのは俺くらいだろうな。

ん？

…どうやらもうじき終わりそうだな。

諏訪の神が使っていた武器が壊れたのだ。

いくらなんでもあの神には素手で戦い続けるほどの力はないだろう。

結局、諏訪の神が負けた。

さて…これからが問題だ。

このままでは色々と面倒なことになりそうだな…

すると俺に気づいたのか睨みつけてきた。
はあ…

なんで諏訪の神とは打ち解けてるのに俺には敵対心むき出しなんだ…

「あんた、さっきはよくもやってくれたね」

「まだ根に持っていたのか」

「いきなりあんな目に」先に仕掛けてきたのはお前だ「…うっ」

「それであいつはどうしたんだい？」

「あいつ？」

「私の後ろについてきていた若いやつだよ」

「…」

「まさか…」

「ああ、殺した」

「なっ!？」

「あんたあの時は助けてたじゃないか」

「あれは別だ」

「だがここは戦場だ。弱者は強者に殺され強者は更なる強者に殺され弱者となる」

「所詮この世は弱肉強食だ」

「…」

「別に復讐したいというのならそれでもいいが」

「そんなつもりはないよ」

「そうか」

「じゃあな」

「え」

「どうした？」

「いや…あいつはいいのかい？」

匠のことか…

「あいつもここにいたほうが幸せだろう」

見ると泣いている諏訪の神を慰めていた。

「俺はこれからも旅を続けるのでな」

「さらばだ」

諏訪大戦（後書き）

匠工
…

輝夜姫（前書き）

投下します

輝夜姫

今は森の中にいる。

何をしているのかというところ最近、噂の輝夜姫を見に来たのだ。ついでに俺の妖怪探知レーダー（体内時計ならぬ体内探知機）が反応しているので様子を見に来たのだ。

しばらく歩いていると花畑についた。
しかし、綺麗な向日葵だな…

そんなことを考えていると

「誰かしら？」

という声が聞こえてきた。

そして、一目で妖怪だということがわかった。

俺は長年、妖怪と過ごしたこともあるし今までに何度も襲われたの
で見ただけでわかる。

「ただの通りすがりだ」

「そうなの」

「はじめまして…そして、さようなら」

いきなり手に持っていた傘で攻撃してきた。

「おっと…」

最近の妖怪はいきなり攻撃してくるから困る。

俺は適当にやり過ごすために幻術をかけるとそのまま都の方に走った。

もちろんあとで俺が逃げたことを知ったあの妖怪は激怒したそうだが…

「さて…ここが噂の…」

見るとすごい行列だった。

ちゃんとここに来る前に近くにいた通行人に確認したので間違いはない。

それにしても嚴重だな…

輪廻眼を通して屋敷を見ると結界が幾重にも張られていた。

まあ、俺には通用しないけどな。

俺は人間だ。

おそらくこの結界は妖怪限定だろう。

まあ、たとえ人間だろうと探知はされるだろうがな。

とりあえず屋敷に侵入することにした。

中を覗くとちょうど輝夜姫が何人かの男たちにくっついてくるようにと言っているところだった。

しかし、残念なことにあれらが見つかることは絶対にはないだろう。

なぜか…それは、全て俺が所持しているからだ。
昔のことだがせっせと貴重品を集めた時期があっただな…

男たちが去ったところで俺は姫の前に姿を現した。

「誰!？」

まあ、いきなり知らない男が現れたら誰でもこんな反応をするだろうな。

俺は人によって名乗る名前を変えることがある。

月の民に対してはペインと六道仙人という両方の名を知られてるがな。

今はちょうど自作の仮面をつけていた。

「ふむ…トビ…とても名乗っておこうか」

「何よそれ……」

「そんなことより噂では上品で美しいと聞いていたが……」

「？」

「上品でもなければ美しくもないな」

「……」

「幼すぎるということだ。成長すれば別だろうがな」

「それにさっきまでは上品だったが今は駄目だな」

「人を呼ぶわよ」

「呼ぶがいい。死ぬだけだ」

これは脅しても何でもない。本当のことだ。

「
…」

「じゃあな」

「待つて！」

「今度は何だ？」

「お願いがあるの…」

お願い…か。嫌な予感がするのだが…
一応聞いておくか。

「…言ってみる」

「…月から守ってほしいの」

「貴様…何を言っているか分かっているのか？」

「ここに張つてある結界はこの中でも有名な陰陽師たちのもののなの」

「それに探知されずにここに来たあなただから…その…」

「なるほどな…」

「いいの!？」

…月から守つてほしい…か。

月には個人的なうらみもある。

小娘を守るついで…というのもありだろう。

「いいだろう」

「本当に!？」

「ああ、本当だ」

「それで?それはいつだ」

「一年後よ」

「そのときに月の使者が私を迎えに来るの」

「迎え？捕縛の間違いじゃないのか？」

「そ、それは……」

「まあ、いいだろう。ではまた一年後に会おう」

「ええ……」

輝夜姫（後書き）

どうでしたでしょうか？トビだと姿をイメージしやすいと思ったので…

約束の日（前書き）

投下します

約束の日

さて…今日が約束の日だったな。
さっそく会いに行くとするか
はあ…

「久しぶりだな」

「あなたは…」

「まさか、忘れたわけではないだろうな」

「ちゃんと覚えているわ」

「でも、これから約束の品を持ってきたという男たちに会わなければならぬの」

「ほう…」

「じゃあ、俺はここで待つことにしよう」

「え…でも…」

個人的にあの男たちがどんなものを用意したのか気になるのだ。

「別にいいだろう?。」

「ええ…」

↓数時間後↓

約束の品を持ってきた男たちが現れた。
まったく…本物がないのによくやるものだ…

「では…」

と輝夜姫が言うが一番右にいた男が立ち自分の持ってきた品を差し出した。

たしか…こいつは…「仏の御石の鉢」だったな…

「これはただの鉢ではないですか」

「そ、それは…」

「駄目です。お帰りください」

すると頂垂れた様子で去って行つた。

「今度は私が…」

するとまた右側の男が立つた。

こいつは…「蓬萊の玉の枝」だったか…

「…」

ほう…なかなか頑張ったじゃないか。
と思つたところで乱入者が現れた。

「皇子！ちゃんと報酬を払ってもらわないと困りますぜ！」

「！？」

皇子と呼ばれた男のほうはビクツとした様子で反応すると壊れた機械のようにゆっくりと振り向き愕然とした様子だった。

あと少しで騙せたかもしれないというのに…

次は…「火鼠の裘」か。

これは本当に燃えない。

天照でも燃えなかったぐらいだからな。

すると翁が火鉢を持ってきた。

この世界にはこれといくつか似たようなものがある。

まあ、どれもよく燃えるがな。

火鉢にいれて火をおこすとあっさりと火がつき燃えた。

まあ、当然だな。

次は「龍の首の珠」だったか。

だが、残念なことに目が李のようになった以外は何も得られなかったようだ。

次は「燕の産んだ子安貝」だ。

だが、これも散々な結果に終わったそうだ。

「…ところで姫」

「なんでしょう」

「姫の隣に座っているその男は…」

「この御方は私の護衛です」

「しかし、護衛なら陰陽師達がいるではないですか」

「この方はあの陰陽師達でさえかなわないような方ですので私の護衛になったのです」

「そうなのですか…」

俺が見ると少しだけ羨ましいものを見るような目で見てきた。

この男達も散々振り回された揚句、何も得られなかった…哀れだな…

「これにて謁見は終わりです」

すると最後に残っていた男は帰って行った。

「それで？今夜が約束の日だったはずだが…」

「ねえ…その…」

「どうした？」

「実は…明日の夜なの…」

この俺を騙したのか…この小娘が…

「い、ごめんなさい。その…許してもら」「別にそんなことはどうでもいい」

「えっ」

「それよりも本当に明日の夜で間違いないんだな？」

「ええ」

「今度、嘘をついたらお前の魂をもらう」

「ひっ」

「ククク…俺はせっかくだからここで待たせてもらう」

「わかったわ…」

そして約束の日になった。

ちなみに嘘をついたら魂を抜くというのは本当のことだ。

今は翁達にそのことについて話しているらしい。

（数時間後）

なぜかぞろぞろと兵士たちが集まっている。

陰陽師の数も数倍に膨れ上がった。

どうなっているんだ…

「これはどういうことだ？」

「そ、それが…」

「おそらくあの翁が帝にこのことを話したのだろっ」

「ええ」

まったく…余計な事を…

「…来たようだな」

「…」

月の方から宇宙船というか…何というか…珍妙な物体がやってきた。そして、それが地上に降りると同時によくわからない光のようなものが俺達を照らした。

すると今まで立っていた兵士たちが全て倒れ陰陽師もまったく役に立たない状態になっていた。

もちろん俺には通用しなかったが。

そして、その中から月の民が現れた。

月の民は俺を見て驚いた様子だったがビームライフルのようなものを取り出すと撃ってきた。

「いきなり撃ってくるのはどうかと思うが…」

「黙れ」

するとさらに撃ってきた。

面倒だな…

「神羅天征」

するとこちらに飛んできていたビームもろとも吹き飛んで行った。

「すごい…」

俺の術を見たやつらはそう言っていた。

だがあと一人生き残りがいる。

そいつは俺に敵対するつもりはないらしいがな。

「永琳！」

姫はそういつとそのまま生き残っていたやつに抱きついた。

「
…」

永琳…どこかで…思い出したぞ。

もとはといえばコイツがいたせいで…

…まあ、いい。

「お久しぶりです。姫」

「ところでその男は…」

「トビって言うの。！」

「トビ…ですか」

「しばらく見ないうちに名前も姿も変えたの？」

「ついでに声もだ」

「…久しぶりだな。月の頭脳」

「私を殺すの？」

「今はそのときではない」

「知り合いなの？それに殺すって…」

「何でもありません」

「それよりも月から逃げないと…」

「月から逃げる…か。それならひとつ良い場所を知っている」

「嘘じゃないでしょうね」

永琳は随分と俺のことを疑っているようだ。

俺からしたらコイツが諸悪の根源みたいなものだからな…

「俺は迷いの竹林と呼んでいるがな…昔は迷いの森…というのが正しかったのだが…」

「しばらく見ないうちになぜか木が竹になっていた」

「そう…今回はあなたを信じるわ。ありがとう」

永琳はそついうと姫を連れて迷いの竹林に向かった。

まったく…これも縁というやつか…

約束の日（後書き）

どうでしたでしょうか。最近はなんだか急な展開が多いような気がします…

商人と鬼（前書き）

投下します

商人と鬼

今は都の外れにいる。

ここらで評判の団子屋に寄って行こうというわけで探しているのだが…

見つけた。

「みたらし団子三つ」

「…」

しかし、ここらで評判とは言っても移動式なので神出鬼没なのだそうだ。

…あきらかに色々とおかしい服装な気がするのだが…
だってサングラスに黒いロングコートとコカトリスのような生物という…

「お前、名前は？」

「メルコールですが何か？」

メルコールって…

「変わった名だな…」

「よく言われるよ。ところでここに鬼の住む山があるんだけど…
知ってるかい？」

「噂で聞いたことがあるな」

「へえ…それじゃ話は早い。ちょっとあそこを通りたいんだけど鬼
が恐ろしくてね？」

「つまり…この俺に護衛をしてほしいと？」

「まあそういうことさね」

しかし、俺の目がおかしくなければコイツは人間には見えない。
いや…姿形は人間だが…

まあ、そのうちわかるだろう。

「じゃあ、あんたが食べ終わったらでいいよ。俺はその間に支度を
済ませておくから」

「わかった」

どうしてこうなったんだろうか…

俺はただ普通に評判の団子を食べに来ただけなのに…

「さ〜て、いざ出発！」

「さっさと行くぞ」

〜数時間後〜

道中で盗賊がでたりして色々と面倒だったが俺がやるまでもなく全
てこの商人のペットが倒していた。

この様子じゃ俺が付いてきた意味がないような…

「しっかりしてくれよ」

「あまり俺を怒らせないほうがいい」

「おお怖い怖い」

まったく怖がっているようには見えないのだが…
というかもしろがつてるようにすら見える。

「まだつかないのか？」

「あと少しで…」

と言っている途中で空から何かが降ってきた。

「ああゝ鬼の登場」

聞いているだけで力が抜けそうになるようなやる気の無い声でそんなことを言ってきた。

「おっとここからは私達、鬼の縄張りだよ！」

意味がわからん。

別に言っている意味がわからないというのではない。
恰好がおかしいのだ。

何で体操服なんだ…

「ここを通りたきゃ私を倒してからにしな！」

というときなり殴りかかってきた。

商人はというといつのまにかかなり離れたところにいた。

足速いな…

絶対に人間の足の速さではどう走ってもあそこまではいけないと思うが…

「余所見してるんじゃないよ！」

「まったく…」

久しぶりに戦ってみるか。

しかし、俺相手にどこまで持つことやら…

「風遁・大突破！」

「ッ！！」

鬼は両腕をクロスして防御したようだが無駄だった。その一撃でどこかに吹き飛んで行った。

「あああああああああああああ！！！！」

その鬼は全身から血を噴き出しながら悲鳴を上げていた。
まあそりゃいきなりこんな衝撃がきて吹き飛ばされたらこうなるよな…

まあ大丈夫だろう。鬼と言うのは無駄に頑丈で無駄に生命力の溢れている妖怪である。

「いやゝ御見事！」

「アイツを殺して売ればなかなかいい値がつきますよゝ」

死んだ妖怪を買い取るところなんてあるのか…

というより何でこいつはあの鬼が生きっていると確信しているんだ？
たしかに鬼は強いし手加減もしたが…

まあ気にしたら負けだろう。

「そんな場所があるのか？」

「ええ、しっかしわからないものですよねえ…わざわざ妖怪の死体なんて買ってどうするんですかねえ？」

「知るか」

とりあえず吹き飛んで行った鬼を回収すると治療してやった。

「何やって…」「黙っている」「」

「はいはい」

と言うと口笛を吹きながら遠くの方を見始めた。
何なんだこの商人は…

商人と鬼（後書き）

また変なキャラが…

ちなみに今後も登場するかもしれませんが
ちなみに今後も登場するかもしれません

大事な事なので二回言いました。

設定的には黒髪でサングラスをはずすと目は赤目で鋭い感じになっています。

とはいってもどこぞの旦那のような感じではありません。

それとこの人物は人間ではなくてなのですがその理由は遙か昔偶然にも冥府への入り口を発見してしまいそこにあったある河につかったために不死身になってしまったという設定です。

そのときに全身がつかつたのでどこぞの英雄のように踵が弱点だとか言う設定はありません。

彼の肩に乗っているコカトリスのような生物は正真正銘のコカトリスです。

火を噴きます。

ちなみに彼の名前は『シルマリルの物語』の登場人物からとっています。

まあ、再登場しないかもしれませんが…

四天王と鬼子母神（前書き）

投下します

四天王と鬼子母神

どうしてこうなった…

俺達は今、鬼達に囲まれている。

なぜこうなったのかというところあの変な鬼を倒した後に山道を歩いていたら頂上に着いたのだ。

そのまま下りて行こうとしたところで急に鬼達が現れて囲まれてしまったというわけだ。

「うひゃゝぞろぞろいますねゝw」

商人の方と言うと相変わらずふざけた様子だ。

「さあ！ぱぱとやっつけちゃってくださいよ！」

人使いの荒い奴だな…

「待ちな！」

「この俺に何の用だ？」

「あんたたちだね？私達のなわばりに侵入した人間ってのは」

どうやらそのまま通るわけにはいかないようだ。
面倒なことになったな…
ちなみに今俺と話している鬼はどう見ても幼女にしか見えないよう
なやつだ。

「そうだと言っただろう？」

「私達と勝負しな！」

「悪いが無理だな」

意味がわからん。
なぜ俺がわざわざ鬼と勝負しなければならんだ。

「なんでさ!？」

「急ぎの用があるのでな」

「私達と勝負しないってんなら…」

「…」

「絶対にここから動かないからね！」

「それは困ったな…」

鬼と言うのは頑固者で一度決めたことは絶対に曲げないタイプである。

だからここで俺が断ればコイツらはここから動かないだろうしそのまま襲いかかってくるだろう。

「ではこうしよう」

「？」

「俺がお前達を倒したらそのまま俺達を通す。もし負けたら好きにしてくまわん」

「どうだ？」

これならさすがに文句はないだろう。

「じゃあさっそく勝負だ！」

すると目の前にいた鬼が戦闘態勢になりもう一人群れの中からでてきた。

「お前は…」

「あっ」

さっき倒した体操服の鬼だった。

「お前も懲りない奴だな…」

「うっ、うるさい！」

と言うといきなり殴りかかってきた。

もちろんあっさり俺にかわされて岩に突っ込んでいったが…

「なかなかやるね！」

「今は避けただけなのだが…」

そして、体操服の鬼と幼女の鬼が連携しだした。
さつきから二人の鬼は俺の周りを高速で移動している。

「この程度か…」

俺はまず体操服を掴むとそのまま腹を殴りつけた。
鬼はそのまま吹き飛んでいき起きあがってくることはなかった。
俺がもう一人の鬼を殴りつけると鬼はそのまま消えた。

「…」

「私の能力は密と疎を操る程度の能力。今は私の体を大気中に霧散させたんだよ」

「ほう…」

「そういうことか。なら簡単だな」

「え？」

「万象転引」

すると鬼はそのまま俺の突き出した手に引き寄せられていった。

「ひ、引き寄せられる!？」

自分の体を霧散したというのならそのまま引き寄せてしまえばいいだけのことだ。

俺は鬼の体を掴むとそのまま殴りつけた。

すると遠くの山まで吹き飛んで行った。

「なんてことだ…」

「あの二人を…」

と言う声が聞こえてきた。

「人間の癖に随分と力が強いんだねえ」

見ると槍を持った鬼がいた。

「今度はお前か？」

「私は鬼子母神だからね。さっきの二人のようにはいかないよ」

鬼子母神といえは…

ここの頂点か…

「最初に言っておくけど私相手に手加減なんて考えないことだね」

と言うといきなり何も無い場所を殴った。

「…」

瞬間まるで空間にひびが入ったかのような状態になり凄まじい衝撃波が発生した。

「…」

もちろん避けたが…

さっきまで俺がいたところを見ると地面や岩がまるごと吹き飛んでいた。

「私の能力は地震を起こす程度の能力さ。この槍も能力を持ってるね？雷を操る程度の能力っていうんだよ」

地震に雷か…

「まるで歩く自然災害だな」

「よく言われるよ！」

それにしても厄介だな。

下手に槍を受け止めればそのままダメージを受けてしまうしかたって近づかなければ遠距離から衝撃波が飛んでくる。

「運が悪かったね！」

「そうでもないぞ？」

「え」

「神羅天征」

「くっ」

するとそのまま吹き飛んで行った。
だがタフなことにすぐに立とうとしている。

「水遁・水龍鞭」

鞭状の水でそのまま拘束した。
俺を槍で攻撃しようとした槍は電撃を帯びたままだったのでそのまま感電した。

「がああああああっ！！！！？」

凄まじい悲鳴をあげ抵抗しているが余計に苦しむだけだ。
しばらくするとピクリとも動かなくなった。

「やったか…」

そして、近づくといきなり目を覚ました。

「何！？」

「かかったね！」

「これで終わりだよ！」

そのまま俺は槍で体を貫かれ電撃を浴びた拳句そのまま振り回され吹き飛んだ。

そして、次の瞬間衝撃波が飛んできた。

俺はよけきれずにそのまま直撃してしまい致命傷を負った。

「ぐはっ」

「ふふふ…勝った…私のがはっ!？」

私の勝ち。そう言おうとしたのだろうがそれは無理だった。なぜなら腹を複数の黒棒で貫かれていたからだ。

「なっ…何がぁ…」

喋っている間にも腹と口からは多量の血を流している。

「分身だ」

「いつ…のま…に…ハア…ハア…ぶはっ！」

「これ以上喋ると本当に死ぬことになるぞ」

「ぐっ」

よくこんな状態で意識を保っていられるな。

「なんてこった…」

「これは悪い夢だ…」

「うわあああああ！」

と様々な声が聞こえてきた。

たしかにいきなりやってきた人間に自分達の大將が負けたんじゃないかな。うなるよな。

商人はいつのまにか俺の隣に立っていて

「フヒヒ…こいつは高く売れる…」

とか言っていた。

どんだけ金が好きなんだ…

まあ、商人だからと言ってしまえばそれまでだが…

「まさか今度も治療してやろうなんて言いませんよね!？」

「そのつもりだが…」

「冗談じゃないっすよ」

「コイツを売れば高く売れますよ?それに鬼子母神に四天王に大量の鬼!これを逃す手はありませんって!」

「それに帝に報告すれば大量の褒美が…」

「俺はそんなものに興味はない」

「そ、そんなあゝ」

「わかったら行くぞ」

「って、もう治療終わったんすか！？はやっ！」

「早くしろ」

「ちょっと！！？待ってくださいよー！」

まったく…これだから人間は…
まあ、俺も人間だな。

四天王と鬼子母神（後書き）

なんか気がついたら鬼子母神がすごいチートに…

まあ、地震を起こす程度の能力はぶっちゃけグラグラの実で思っていた能力なんですけどねえ。

それと鬼子母神の持っていた槍は夫の形見みたいなものです。

安倍清明（前書き）

投下します

安倍清明

「待ってくださいよ」

「…」

まったく…それにしても遠いな。
次の目的地まであとどのくらいあるのかは知らないが…
地図で見たときはかなり離れていたはずだ。

「旦那」

コイツはいつの間にか俺のことを旦那と呼ぶようになっていた。
こうして歩き続けて四日もたつが…

そんなことを考えていると

「止まれ！」

という声とともにぞろぞろと妙な服を着た男たちがでてきた。

「…」

「貴様らだな？妖獣を連れている怪しいやつらというのは！」

いつのまにそんな噂が流れたのか…
というよりこいつらは何なんだ…

「妖獣？馬鹿言っちゃいけねえな。こいつは妖獣じゃなくて珍獣っすよ」

この時代じゃどっちも似たようなものだが…
たまにただの珍獣を妖獣と騒ぎ立てて狩ろうとするような馬鹿もいるからな…

「黙れ！…まさか貴様も妖怪か！？」

どうしてそうなった…

「はあ…いるんすよねえ。こついつ似非陰陽師が…」

「似非だと！？」

「妖怪風情が！」

「退治してやる！」

という聞き逃せない言葉が聞こえた。

「貴様らか妖怪狩りをしている人間というのは」

俺はたまに妖怪たちから情報をもらっているのだ。

妖怪たちからは弱い妖怪がどんどんやられているという話を聞いた。

「運が悪かったな。貴様らは生かしておくわけにはいかん」

「はあ！？何を「火遁・豪火球の術」…ぎゃあああああああああ
ああ！！！」

そしてすぐに燃え尽きた。

すると後ろの方から足音が聞こえた。

「遅かったか…」

女の声だった。

見ると陰陽師の恰好をした女だった。

写輪眼を通して見るとわかるが今までに見たどの陰陽師をも凌ぐほどの霊力を持っていた。

まあ、過去にはこいつに匹敵するほどの力の持ち主もいたが…

「貴様…何者だ？」

俺が聞くと女は

「私か？私は安倍清明だ」

「安倍清明って…最強の陰陽師って言われてるあの安倍清明っすか！？」

最強…ねえ…

「む…知ってるのか。そう言われると照れるな…」

少し照れくさそうにそう言った。

「尋ねたいことがあるのだが…」

「…何だ？」

「このあたりに妖獣を連れた怪しい二人組がいると聞いたのだが…」

「…」

「…」

「それが俺達だと言ったらどうする？」

「…！」

ここで戦っておくのも悪くはないだろう。

少し最強の陰陽師というものに興味が湧いたのだ。

ついでに狩ることができれば俺も満足できるし妖怪の敵が減って一石二鳥というやつだ。

「お前達か！このあたりの村々を荒らして回っている妖怪というのは！」

「何だと？」

「とばけるな！退治してやる！」

こいつもか…

すると札のようなものを投げつけてきた。

見ると急激に靈力が集約し大爆発を引き起こした。

あの陰陽師を見ると手にいくつもの札と周囲に大量の靈力の塊が浮いていた。

「少し面倒だな…」

しかし本当に化け物だな。

本当に人間なのだろうか。

宙に浮いている靈力の弾の一つ一つが質も高く密度の濃いまさに靈力の塊だ。

手に持っている札を投げるとそれらは爆発し俺の視界を一瞬奪った。だがそれでも十分だったらしく次から次へと俺のいる場所に弾が飛んできては凄まじい爆発を引き起こした。

それがしばらく続いただろうか。

俺はと言うと無傷だ。

なぜかというところ、札が爆発する瞬間に時空間忍術で木の上へ飛んだのだ。

あいつはそのことに気づいていないらしい。

だがさすがに爆発が収まったところには気づいたらしく俺のいる木の上にもわかって極太の光線を放ってきた。

霊力の集束砲か…

それも一つや二つではない。

弾幕を俺が避けるたびに先読みしてきたのでかなり面倒だった。

…飽きてきたな。

はつきり言ってワンパターンである。

おそらく前もってちゃんとした準備をしてこなかったのだろう

「土遁・岩柱槍」

するとやつ足元からいくつもの岩槍が出てきて奴を串刺しにしようとした。

すると奴はそれ避けるために空を飛んだ。

「ちっ」

「これなら地面からでてる槍も届くまい！」

「クク…風遁・神風」

俺は両手の先から複数の竜巻を作り出すとそのまま奴を攻撃した。危なっかしく飛びながらそれでも何とか避けているようだ。ちよこまかときざかしい奴だ。

「水遁・大爆水衝波」

「これはどうだ？」

「水遁・千食鯨」

おびただしい数の鯨が迫るのを見た奴は慌てて逃げようとしたが俺も当然それを追った。

すると奴がいくら逃げようとしても巨大な水玉から出ることはできなかった。

当然だ。この水も俺を中心に移動しているからな。

奴は逃げつつもどんどん襲いかかる鯨を倒していった。

まったく…人間の癖によくやるな…

そのまま全ての鯨がやられてしまった。

「
…」

まさか、ここまでてこずるとは思わなかった。

まあ、遊んでいた俺も悪いと思うが…

というか商人はどこに行ったんだ？

どこにもいなかった。

また逃げたのか…

しかも、遠くに逃げる癖に戦いが終わると何事もなかったかのように隣にいるから腹が立つ。

まあ、護衛みたいなものだから仕方がないと言ってしまえばそれまでなのだが…

「水遁・大瀑流」

少しチャクラを込めすぎたか…

というより水の量が多すぎた。

いままで大量の水にすぎなかったそれは今や巨大な水でできた竜巻と化していた。

それはいとも簡単に周囲を破壊していった。

そろそろ止めるか…

竜巻が動きをとめると俺の近くをぼろぼろになった奴が漂っていた。

これからどうしようか…

安倍清明（後書き）

安倍清明まで登場しましたね。
どうでしたでしょうか？

復讐の炎（前書き）

投下します

復讐の炎

「いやゝさつきはえらい目に遭いましたねえゝ」

相変わらず逃げては何事もなかったかのように隣に…
何でこんなやつの護衛なんか引きつけたのだろうか…

「はあ…」

「旦那、ため息をすると幸せが逃げるってどこかで聞いそれより目的地まであとどのくらいだ？」

「旦那、人の話しは最後まで聞いた方がいいですよ」

「早くしろ」

「へいへい」

「次の目的地までは…もう少しすすね」

もう少しして…

「どのくらいだ？」

「とにかくもう少しっす」

「…」

「…」

面倒な奴だな…

金を搾り取ってやろうか…

「む…」

何を思ったか俺を見つめてきた。

「>
●<
●<
」

「そんな目で俺を見るな」

「なんだか財布に危機を感じたんすよ」

何て奴だ…

というよりこいつ人の心を読めるんじゃないか？

まあ、俺の心を読もうとすれば弾きだされるがな。

〽数時間後〽

「ふう…」

「いや〽旦那、お疲れ様っす」

「ふん、二度と顔も見たくないな」

「そんな〜」

と言って俺が帰ろうとすると

「ひとつ！いや、一口でもいいんです！食べ物恵んでください！」

という声が聞こえてきた。

何だと思って振り返ると小汚い小娘とさっきの商人がもめていた。

「なんすか、乞食に恵むものなんてないっすよ。しっしっ」

商人はそう言っていたが小娘のほうは足にしがみついたまま離そうとしない。

「何をしている」

「旦那、こいつを引きはがしてくださいよ」

「旦那」

「わかったから静かにしろ」

さっきから旦那、旦那って…

まったく…せつかくこいつとおさらばできると思ったのに…

そして、俺は小娘を商人の足から離れさせた。

しかし、どこかで見たような…見ていないような…

俺がしばらく見ていると小娘の方も俺の方を見ていた。

「お前は…」

思いだした。

輝夜姫にしつこく求婚していた藤原不比等とかいう貴族のガキか。

だが、ありえん。

あれから軽く二百年はたっているはずだ。

だが、目の前の小娘はあのとときとまるで変わっていない。

似ているだけか…子孫か何かか…

だが富士の山に薬を捨てに行った奴らが帰ってこなかったという噂を聞いた。

たしか不死の薬だけが無くなっていたとか…

ただ単に捨てた後に死んだのか…誰かに奪われたのかは定かではないが…

「貴様…名は？」

「…妹紅です」

「藤原か？」

「！」

「あなたは…まさか…でも、どうして…」

「どうやら覚えていたようだな」

実はたまに会うことがあったのだ。

屋敷に侵入しては求婚している貴族たちの様子を窺っていた。

それに俺には見える。

こいつの瞳の奥に燃える復讐の炎が…

そして、妹紅が輝夜姫をうらんでいることを知った。

これで俺が見た物が間違いなく復讐の炎だったのが証明されたわけだ。

「それで？お前はどうするつもりだ？」

「そ、それは…」

「見たところ水も食料もないようだな。それに都の外はお前のような者が生きるにはつらいだろう」

「…それもこれも全て…あいつのせいだ…」

「そうだ。あいつのせいだ。お前は何も悪くない。あいつがいたからお前の人生は狂ったんだよ」

「うわああああああああああ」

泣きながら俺に抱きついてきた。

ふむ…見たところチャクラが無いに等しいな…
代わりに霊力か…

「俺のところに来るか？」

「いゝ、いいんですか？」

涙と鼻水で顔をぐちゃぐちゃにしながら聞いてきた。

「いいぞ」

「うわああああああん」

まったく…まるでガキだな。

中身はとつくに二百歳を超えているだろうに

ふと見ると商人が見ていたがこちらの視線にきづくと口笛を吹きながらどこかに去って行った。

復讐の炎（後書き）

どうでしたでしょうか？

少し強引な気もしますが気にしないでください。

仙人の苦悩（前書き）

投下します

仙人の苦悩

「はむ…はむ…」

「…」

今は朝食を食べているのだが妹紅はさつきから口に大量の飯を頬張っている。

飯に足が生えてきて高速で逃げだしたらおもしろいんだがなあ…
想像してみたが…すごく…シユールです…

「俺はさきに行くから飯を食い終わったら来い」

「は、はい！」

なぜ俺が復讐心を煽るようなことを言ったかと言うと単純にどこまで強くなるのかを試すためと永琳と輝夜にぶつけるためだ。

なかなかおもしろいことになりそうじゃないか。

俺の天敵は退屈だ。

他には人間と月の民だな。

とはいっても俺自身も人間だな。

今日は妹紅を鍛え上げる修行の初日だ。

最初のうちは忍術に近いことをやってもらおうと思っている。というのもチャクラが無いと言ってもいいくらい少ないので代わりに靈力で補おうというわけだ。

その場合、限りなく忍術に近いが陰陽術や妖術に似た何かになるがな。

それに時間は腐るほどあるし何の心配もない。

今までの旅で様々なことを知ったがそのうちの一つは靈力、妖力、神力、魔力はどことなくチャクラに似たところがあるということだ。

あのあと聞いたのだが不死の薬を盗んだのは妹紅らしい。

「師匠！」

「来たか。さっそく始めるぞ」

「はい！」

「俺が今から使う術をよく見ている」

「火遁・豪火球の術」

それを見せてやると妹紅は驚いた様子だった。

「陰陽師なんですか？…でも少し違うような…」

「俺は陰陽師でもなければ陰陽術を使っただけでもないぞ」

「え？じゃ、じゃあ…えと…その…」

「どうした？」

「お、怒らないでくださいね。…妖術ですか？」

「…」

何で俺が怒ると思ったんだ。

たしかに俺がそこらにいる普通の人間だったら妖術を使っているなんて言われたら怒っていたかもしれないが…

「違うな」

「怒らないんですか？」

「なぜ、怒る必要がある」

「そ、そうですか…（ホッ）」

「簡単に言つと忍術だな」

「？」

「まあ、今は陰陽術にも似ているが妖術にも近い何かと思っておけばいい」

「そうなんですか…」

見ると少し残念そうにしていた。

「なぜ、残念そうなんだ？」

「実は陰陽師に憧れたことがあって…それで、妖怪退治してみたい

なあゝなんて思ったこともあるんですよ」

なん…だと…

たしかに最近はそういう陰陽師に憧れるガキもいるが…
まさか、目の前のコイツがそうだとは思わなかったな。
そんな俺の様子を見てなにかを感じたのか

「どうかしたんですか？」

と心配そうにおれのことを見ていた。

この場合どうすれば…

いや、いつそのことこのまま育てるか…

悩むな…

「妹紅、お前は妖怪が嫌いか？」

「え？」

「お前は個人的に妖怪が嫌いか？」

「ええ。妖怪は嫌いです」

困ったな…

これは将来に賭けるしかなさそうだな…

「それよりもさっきのが忍術だ。わかったか？」

「は、はい…たぶん…」

「たぶんじゃ駄目だな」

「意外と厳しいんですね」

「何だと？」

俺が少し睨むといきなり

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

と謝ってきた。

俺としては俺自身がこのガキになめられていた&修行をあまく見られていたことに少し反応したただけだが…

都や村を歩いているとたまに少し目を合わせるだけで土下座してくるやつもいるからな…
俺ってそんなに怖いかな？

「ごめんなさいごめんなさいごめ」俺はしつこい奴は嫌いだ」「

「そうなんですかな…でも、その…怖かったから…」

「ひとつだけ聞きたいことがある。」

「なんですか？（ゴクリ）」

「俺ってそんなに怖いかな？」

「え？」

「二度も言わせるな」

「はい！すごく怖いです！とくにその穴からのぞく鋭い目がすごく怖いですううー！！！」

俺でも驚くくらいの早口でそう言ってきた。

「そうか…」

「…今日は自力で火をだせるようになるまで飯は抜きだ。それと家にあがるな」

「えっ!？」

「何を驚いているんだ？」

「だって…何がだってだ」

「人間というのは厳しい試練を与えられて初めて真価を発揮するものだ」

人間というのはたまに信じられない馬鹿力を発揮するときがある。それこそ、そこらの妖怪を押し飛ばすくらいだ。火事場の馬鹿力ってやつだな。

「とにかく頑張れ」

「そんな」

はあ
…

このままではこれからが大変だな
…

仙人の苦悩（後書き）

どうでしたでしょうか？

別れと出会い（前書き）

投下します

別れと出会い

あれから何年たったかは知らないが…

いろいろあったなあ…

妹紅の口調が変化したり…術を使えるようになったり…

「おい」

すっかり口調が変化してしまって…前はちゃんと敬語だったのになあ…

はあ…

どこで育て方を間違ったのだろうか…

「私の話を聞けって！」

「…少しは静かにしろ」

「……！！！！」

すると妹紅はいきなり俺の寝ている布団をひっくり返した。

「
…」

「何とか言えよ！」

「お前は俺にかまってほしいのか？」

「違う！」

「じゃあ何だ」

「うつ…それは…」

面倒な奴だな…

最近はこんな日々が続いている。

なぜ俺の周りにはこうも面倒なやつが集まるのか…

磁石じゃあるまいし…

「…そうか…あれか…」

俺がそういうと妹紅は

「？」

頭に？マークを浮かべていた。

「お前もとうとう性にめざ」誰が目覚めるかあああああ！この変態めえええ！」

顔を真っ赤にしながら俺を焼き殺そうとしてきた。
ほんの冗談で言ったのだが…

「落ち着け」

「これが落ち着いていられるか！」

「だいたいなんだよ！せ、せ…ああもう！！」

そのままドタバタと騒がしく出て行った。

妹紅もついに反抗期か…

「まったく…」

それともうそろそろ俺が教えることもなくなったころだな…
というよりは俺が見るにあいつはもう十分に一人で生きていけるく

らしい力を持っている。
そろそろ別れ時か…

何か言つのも気まずいしな…
このまま出ていくか…

「…」

そうして俺は家を後にした。

〈妹紅〉

まったく…トビのことを考えただけでイライラする！
何なんだよ…この気持ちは…

はあ…

そろそろ帰るかな。

「あれ？おーい…いないのか？」

〈数時間後〉

「どこに行つたんだよ…」

く数日後く

そして、妹紅は悟った。

いや、元から分かっていたのかもしれない。
だが、認めたくなかった。

自分の師匠であり親とも言うべき大切な存在が自分を残してどこか
に行ってしまったという事実を…

「トビ…何で…何で…何で私を置いて行っただよ…うわああああ
あああああああ！！！」

くトビく

はあ…

そういえばこのあたりに命蓮とかいう僧がいるってどこかで聞いた
な…

試しに行ってみるか。

ついたな。

…しかし、これが高名な僧のいる寺…か…
この中からはいくつかの妖力を感じるのだが…

とりあえず入ってみるか。

中に入ると一見何の変哲もない寺だが…

「どなたでしょうか？」

見ると僧？らしい女がいた。

「ここはお前の寺か？」

「…そうですが」

「ふむ…妖怪がいそうな寺だな」

「妙なことを言わないでください。この寺に妖怪なんているわけがないじゃないですか」

「嘘はつかないほうがいいぞ」

俺がそういうと女の方は

「えっ」

と驚いた様子だった。

俺が妖怪が隠れているであろう場所に行こうとすると

「なにを言っているのかはわかりませんが勝手に寺の中を」「寺を見るのに勝手も何もないだろう」「」

慌てた様子で俺の行く手を阻もうとした。

まあ、無駄だったがな。

「そ、それは…」

「お前が妖怪を隠しているのはわかっている」

と言うといきなり妖怪たちがでてきた。

「あなたたち！」

「白蓮様は下がっていてください」

「でも…」

「わかりました」

と言うと少しだけ下がった。

「何のつもりだ？」

「秘密を知れたからには生かしておくわけにはいかん」

「だが、このことを誰にも話さないというのなら見逃してやる」

はあ…

どうしてこうなるのだろうか…
面倒だな。

「断る。と言ったら？」

「「「ここで死んでもらう」「」」

「随分と物騒なやつらだな。それにしても…この俺を殺す…か」

「「「死ねえ！」「」」

その声とともに何人かの妖怪が飛びかかってきた。
もちろん俺は時空間忍術で飛んだがな。

「何!？」

「貴様…何者だ!」

「俺か?俺はただの人間だ」

「「お前のような人間がいるか!」」

お前のような人間がいるか!…か
随分と懐かしいな…

「何か勘違いをしているようだから言わせてもらっが…俺は別に
前達と争うためにここに来たのではない」

「嘘をつくな!」

「その僧」

「…なんでしょう?」

「名は？」

「聖白蓮です」

聖ねえ…

俺が噂で聞いた僧も聖だったな…

「お前から何とか言ってくれ。少なくともお前なら人の話もわかるだろう？」

「わかりま「御下がりください！」「」

「あなたたちこそ下がっててください。このままではこの方と争うことになります」

「しかし…」

「私にはこの方が嘘を言っているようには見えません」

白蓮がそういうとそのまま下がっていった。

「私に何か用でしょうか」

別れと出会い（後書き）

なんだか展開が急すぎるような気がしなくてもないですが…
あまり良い話がいっつかなかったの…

それとこれからは更新ペースが落ちるかもしれません。
次話に続きます。

まったく関係ない話ですがデジモンって神曲が多いですね。
まあ、あくまで個人的にそう思うだけです…

ちなみに自分はデジモンシリーズのアニメは全て見ました。

滞在（前書き）

投下します

滞在

「私に何か用でしょうか」

「ああ、少しの間ここに滞在させてほしいのだが…」

「それくらいなら構いませんよ」

しかし、この僧は人を疑うということを知らないのだろうか。
考えても見てほしい。

ある日、突然仮面をつけたいかにも怪しい男が訪ねてきて自分の家に滞在させてくれと言ってきくるんだぞ。普通ならそんな怪しい奴を滞在なんてさせないだろう。

というか相手をする時点でどうかと思うがな。

「ちゃんと宿泊用の部屋もあるので私についてきてください」
数分後

「随分と広い寺だな」

「…ええ」

俺が何をしたというのだ。

だいたい予想はつくが（おそらく弟のことだろう）会話中にいきなり暗い顔をするのはやめてほしいものだ。

「……です」

「……」

本当に広い寺だな。

俺がその気になればもっと広い建物を作れるがな。

「では……」

「ああ」

するとそのままどこかに行った。

ふう…これでようやく休むことができるな。

見るとまさに和風と言った感じの部屋だった。

すると天井裏から物音がした。

「……」

「チュー…チュー…」

誰がいるな…

俺はさっそく神威で天井裏に転移した。

そこには鼠男…いや、鼠女がいた。

なんだかシルエツトにしたらどこぞの黒い（おいバカやめろ）…なんだかやめておいたほうがいい気がしたのでこれ以上この鼠女の容姿にふれるのはやめておこう。

未だに俺が背後にいることに気づいていないようなので肩をたたいてやると壊れた機械のように（まるでギギギ…という擬音が聞こえてきそうだ）ゆっくりと振り向いた。

「あはははは…あの…何かご用でしょうか？」

暗い中でも顔が引き攣っているのがよくわかる。

それと少し顔がピクピクしていた。

なんだか無理をして敬語を使われているような気がするの俺だけか？

「少し問題があつてな」

「…何でしょうか？」

「…実は俺の目の前にその問題の元がいるのだが」

「ですよー」

と言って逃げようとしたので首のあたりを掴んだ。

「ひっ!？」

「安心しろ。お前がこの部屋とは違う場所にいけばいいだけだ。」

「…あとはわかるな？」

と聞くと鼠女は何度も頷いていた。

そして、俺が離してやるとすぐに別の場所に行こうとしたが…

「そつえばひとつ聞きたいことがある」

俺のその言葉にビクツと反応した。

一体俺が何をしたんだ…

「…?」

「お前の名前を聞いていなかったな」

「…ナズーリンです。私は用事があるので！」

と言ってまるで逃げるように走り去った。

はぁ…

「…」

俺も部屋に戻るか…

滞在（後書き）

主人公エ…

なんだか最近の主人公は怖がられてばかりですね。

まあ、普通ならそういう反応をするんでしょうが…

今回は滞在するためにできた余分な話のようなものでそれだとあまりに短くなってしまうのでナズーリンを登場させておきました。

まあ、他にも何か登場させればよかったんですがね。

今気づいたのですが聖命蓮について一言も語ってないのに主人公は知っているみたいになっていますね…

無理があるかもしれませんが「ちゃんと宿泊用の部屋もあるので私についてきてください」と「随分と広い寺だな」の間で話したということで…

集落（前書き）

前回の話ですが少しでも修正している部分もありますのでまだ見ていない方はどうぞ。
投下します

集落

そろそろ朝か…

しかし、昨日は驚いたな。

まさか、聖命蓮が死んでいるとはな…

（昨日）

「ところでさっき俺が質問したときにお前は自分の寺だと言っていたが…ここは聖命蓮の寺じゃないのか？」

これがさっきから気になっていたのだ。

なぜ、妖怪たちが高名な僧の寺にいるのか。そして、聖白蓮の寺になっっているのか。

「弟は…死にました」

「…」

驚いたな。

死んでいたとは…

まあ、所詮は人間だからな。いくら力があろうと命には限りがある。まあ、俺も人間だからな。

「病だったんです。それで…弟は…」

そのまま顔をうつむかせて黙り込んでしまった。

「…それよりも部屋に案内してくれ」

「…分かりました」

〈現在〉

はあ…

「…失礼します」

障子の向こうから声が聞こえてきたかと思うと障子が開いた。誰だと思い見てみると聖白蓮だった。

「私はこれから集落に向かいますが何かあれば妖怪たちに言ってください」

「集落？」

「この山の麓にある集落です」

「人間か…」

「そうですね？」

「独り言だ」

「そうですか」

こんなところにも人間がいるのか…
本当にどこにでもいるな。

まあ、人間がいるからこそ妖怪が存在できるんだがな…

「私はこれで…」

「…」

「数十分後」

今は朝食の時間だ。

それよりもここにいる全員が俺の顔を見ているのだが…

まだ仮面はとっていない。

もしかして仮面の下が気になるとか？

まさか…な…

俺が目を向けると目をそらされるという…

俺が何をしたんだ。

「…」

「そんなに俺の顔が気になるか？」

と聞いてやるとビクッとしたあとに首を振った。

するとそのうちの一人が

「まずは仮面をとってください」

と言ってきた。

「もちろんそのつもりだが…さっきからなぜ俺の顔を見ようとする

んだ？」

別に仮面をとらなくてもその気になれば食事はできるが……

「「「「「……」」」」」

なぜそこで黙り込むんだ。

「いただきます」

「ごちそうさま」

「「「「「ってはやっ!？」」」」」

すると俺のほかにはいた妖怪たちが小声で話し始めた。

「おい仮面をとるのみたか？」

「いや見てない」

「いつのまに……」

「せつかくのチャンスが…」

「く、悔しい」

写輪眼で読み取ったらちよっぴんな感じだった。

「…」

「どこにいくのですか？」

俺に話しかけてきたのは寅丸星とかいう妖怪で毘沙門天という神の代理人らしい。

妖怪が神の代理人をするというのも変な話だな。

「聖白蓮が行くと言っていた集落だ」

「しかし、あそこに行くまでの道は危険です。あなたには無理なのは…」

「その心配はない」

「それとも俺がそろで野垂れ死ぬような奴に見えるか？」

「そうは見えませんが…」

「というか俺はこの山にも登ってこれたんだから今更心配することでもないと思うが…」

「それに別に歩いていく必要もないしな。」

「まあ、急ぎでもないしのんびり歩いて行くな。」

「行ってくる」

「いつてらっしやい」

「数時間後」

「思いのほか早く集落についた。」

「しかし、小さい集落だな。」

「まあ、これでも普通なんだろうがな。」

「なぜあなたがここに？」

「集落を見に來ただけだ」

適当に集落を歩いてっていると聖に会った。

手にはいくつかこの集落でに手に入れたであろう物を持っていた。

「ところで「きゃあああああああ!!!!」」

「トビ!あなたは逃げ」一言言っておくが俺はお前が思っているほど弱くはない」

「では一緒に來てください」

まったく…人がせつかく案内を頼もうとした矢先にこれか…
最近の俺は運が悪いな。
はあ…

悲鳴が聞こえた場所に行ってみると土蜘蛛がいた。
土蜘蛛は集落の人間を襲っているようで既に食われているやつもいた。

汚い喰い方をするやつだな…

俺のすぐ近くにも骨やら肉片やらが飛んできた。

「何であたらねんだよオ!!」

と言つて今度は脚で薙ぎ払おうとした。

「風遁・風切りの術」

素早く術を発動させそのまま切り刻んでやった。

「ぎゃあああああああああ!!!!」

「…」

死んだか。

俺だつて相手が妖怪だろうが殺るときは殺る。

俺は人の話を聞かない奴が大嫌いだ。

どこぞの親父風に言うとは…

「俺はな!青い空も嫌いなら、白い雲も嫌いだし、水も嫌いなら、

空気も嫌いなんだ!しかし、何が一番嫌いかって言うとなあ…人の話を聞かない奴だアアア!」

って感じだな。

そんなことを考えているといつの間にか聖が俺の前にきていた。

「何か用か？」

「…帰りましょう」

いつの間にか用事をすませたようだ。
なんか疲れたし俺も帰るか…

「ああ」

そのまま俺達は寺に帰った。

集落（後書き）

どうでしたでしょうか？

共存（前書き）

投下します

共存

ふう…

今は夕食の最中なのだが…

今度こそ俺の顔を見逃すまいとさっきから複数の妖怪たちに凝視されている。

「…」

「> ● < > ● <」

「そんな目で俺を見るな」

「…」

「…やめなさい」

聖がそういうと少しだけマシになった。

それでもときどきチラチラとこちらの様子を窺ってくるので鬱陶しい。

「あなたも仮面をとりなさい」

「もちろんそのつもりだ」

「では…」

「「「「「いただきます」「」「」「」

「「うちそうさま」

「「「「はやつ!?!」「」「」

「これくらいでなければこの先生きていけないぞ」

と俺が言つと妖怪たちは

「一体何があつたんだ…」

と言つていた。

「じゃあな」

と言って部屋に戻ろうとすると
聖が俺に話しかけてきた。

「あとで話があります」

「わかった」

とりあえず部屋で待つことにした。

部屋で待つこと数十分。

聖が来た。

なんだか少し離れたところから視線を感じるが…

あえて無視しておくことにした。

「それで俺に話があるのだろうか？」

「ええ…」

「あなたは妖怪と人間の共存についてどう思いますか？」

「いきなり何を言い出すかと思えば…」

「無理だな」

これは当たり前のことだ。

妖怪と人間のどちらに聞いても同じ答えが返ってくるのはまず間違いない。

それにしても妖怪と人間の共存か…

「それにそんなに簡単にいくのなら誰も苦労はしない」

「しかも、その場合、畏れが減り妖怪が弱体化…最悪の場合はそのまま消滅する可能性もある」

妖怪と人間の共存についての問題は山ほどある。

「ですが…」

「妖怪と人間の憎しみの連鎖」

「？」

「妖怪と人間は遙か昔から互いに憎しみ合い殺し合ってきた。それは一種の呪いのようなものだ」

「それは…」

「お前は妖怪と人間のお互いにある役割というものをまるで理解していない」

「役割？」

「そうだ。これがあるかぎり妖怪と人間が本当の意味で共存することとはありえない」

「妖怪は人間を襲い人間が妖怪を退治する。これは遥か昔から続いていたことだ」

「まあ、妖怪の中にはお前のように人間との共存を望む変り者もいるが…」

「あなたは共存を望まないのですか？」

「望まないな。個人的には複雑な気持ちだが…」

これは本当のことだ。
俺個人の意見としては人間が憎い。

まあ、それでも人間というだけで憎いわけではない。
人間の中にも稀ではあるが良い奴もいる。

だが、妖怪と人間の関係を考えれば今の状態が一番なのだ。

「…あなたの考えはわかりました。私は明日の朝からしばらく留守にします」

「貴様…まさか」

「ええ。私は妖怪と人間の共存について集落で話し合うつもりです」

「正気か？下手をすればその先に待っているのは死。運がよくても封印だ」

「私は人間を信じます」

「人間は貴様が思っているよりも醜い。人間は自分達のためなら相手が自分の恩師だろうが肉親だろうが親しい友だろうが平気で裏切るようなやつらだぞ」

「ふふ…それなら私とあなたはどんなんでしょうね」

「…生意気な奴だ」

「おやすみなさい」

「…」

俺はそのまま眠りについた。

共存（後書き）

どうでしたでしょうか？

しかし、主人公も丸くなりましたねえ。

第一章のころと比べたらまるで別人ですよ

犠牲になつたのだ…（前書き）

投下します

犠牲になったのだ…

朝か…

障子を開けてみるとまだ薄暗かった。

どうやら早起きしてしまったようだ。

俺はしばらく部屋でゆっくりすることにした。

〳数時間後〵

今は朝食をとるために部屋に向かっている。
するといきなり星に話しかけられた。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

「そつえば聖はもう集落に行ったのか？」

「なぜ私に「昨日盗み聞きしていたのはお前達だろう」」

俺がそう言つと

「…はい」

少し恥ずかしそうに返事をした。

「お前達は聖を止めるべきだった。聖が戻ってくることはないだろう」

「私は人間を信じています」

「もちろん聖のことです」

なぜこいつらは人間を信じることができるのだろうか。

俺には全ての人間を信じることはできない。

たしかに人間の中にも善人はいる。

だがそれはごく一部だ。

人間は相手が誰であろうと自分のためなら平気で裏切る。

そのくせ自分が裏切られたときには豚のように喚き散らす。

人間は本当に勝手な種族だ。

まあ、俺も人のことは言えないがな。

「だが、心のどこかでは人間のことを疑っている自分がいる。そうだろうか？」

「それは…」

「自分に嘘をついてもあとで苦しむだけだ」

俺はそういうと部屋に向かった。

「今度こそはトビの顔を見るぞ！」

「「「「おおおおおおお！！！」」」」

「騒々しいぞ」

「ふははははは！何とでも言うがいい！」

だめだコイツら…早く何とかしないと…

「「「「いただきます！」」」」

「まったく…いただきます」

「…いただきます」

何だか一人だけ元気の無い奴がいた気もするが気にしないことにした。

「「「「「>●<>●<「「「「「

他の奴らはどうとすごい勢いで飯を食いながらこちらを見つめている。

「しかたない…アレを使うか」

「「「「「?「「「「「

その場にいた全員が頭に?マークを浮かべていた。

「「「「「!?「「「「「

だが次の瞬間には疑問は驚愕に変わっていた。
なぜかという俺が仮面に開いた穴に次から次へと朝食を吸いこんでいったからだ。

これには一人だけ元気の無かった星も驚いた様子で俺のことを見ていた。

「何なんだよそれ!？」
妖怪の一人が質問してきた。

「これは…」

「これは？」

「これは…」

「……(ゴクリ)……」

「これは「大変だ——!」」

いいタイミングだ。

まあ、わかってたからこそ言うフリをしたんだがな。

「どうしたんだよ。今は重要な「それどころじゃない!聖様が人間に封印された!」」

「「「「!?!」」」」

「思った通りだ」

それを聞いてその場にいた妖怪たちは

「なんてことだ…」

「人間め！」

「…」

口々に人間に対して恨みの言葉を発する者や放心状態の者、驚きを隠せない者がいた。

「トビ…」

俺がその様子を見ていると星が話しかけてきた。

「白蓮は犠牲になったのだ…古くから続く因縁…その犠牲にな」

「
…」

「お前はどつするつもりだ？」

「え？」

「おそらくこの寺が信仰されることは二度とないだろう」

「そんな…」

「それよりも気になるのは人間達がどう動くかな」

「「「「「「「「「「「？」

「おそらく人間はここに攻めてくるだろうな」

「な、なぜ」

「お前達は人間を知らなすぎた」

なんせ既に俺が張っておいた結界に引つ掛かっているからな…

「もうそろそろだと思っが…」

「人間が攻めてきたぞー」

「何だと!？」

妖怪たちは驚いた様子だったがすぐに人間達のいる場所に向かった。

俺はこのことに手出しをするつもりはない。

なぜかというところは白蓮が自分で考えて行動した結果こうなったからだ。

たしかにこれは白蓮の望む結果ではなかっただろう。

だが、結果的にこうなったのは事実だ。

これは俺が手出しすることではない。

そして、俺は寺を後にした。

犠牲になったのだ…（後書き）

白蓮は犠牲になったのだ…

それと実は一度この話はエラーで犠牲になってるんですよえ…
そのせいで微妙な話になってますが…

この話を投稿しようとしたら「エラーです」って書かれてて…おも
わず画面の前で「ナンテコッタイ」って言うてしまいましたよw

時間は犠牲になったのだ…

九尾（前書き）

投下します

九尾

今は都に向かっている。

都から妖力を感じたので見に行こうというわけだ。

いくら隠しても俺の目から逃れることはできん。

妖力を感じたのは鳥羽上皇とかいう人間のいる宮中だった。
警備が厳重だったがあっさり侵入に成功した。

「
…」

中に入るとちょうど妖力の持ち主であろう妖怪がいた。

とは言っても周りの人間にはただの美女としか映らないだろうがな。

とりあえず声をかけてみることにした。

「話をしないか」

俺が声をかけてやるとすぐに俺の方に振り向いた。

「何だお前は！」

「お前は妖怪だろう」

「なぜ知っている」

「人間の癖に…」

人間の癖に…か。

妖怪はよく人間のことを自分の格下として見る。

そして、自分の力に慢心し敗北する。

よくあるパターンだ。

「お前には死」それよりも噂では上皇は病に倒れたと聞いたが…」

「ああ、その通りだ。それがどうかしたのか？」

「それなら早く逃げるのが吉だぞ」

「何だと？」

「もうじきここに一人の陰陽師と数人の人間が来るはずだ。お前は
その陰陽師に正体を見破られ無様に逃げることになるだろう」

「言わせておけば……」

「おつと誰か来たようだ」

「……」

部屋に入ってきたのは俺の思った通り清明の子孫だった。

まあ、清明は既に死んだとされているが実際は今でも若い姿を保ちながら生きている。

しばらく見ているとやはり正体を見破られたようで本性を現し九尾としての姿で逃げだした。

「……」

俺は神威で転移すると九尾が行動を起こすまで待つことにした。

なぜ待つかと言うとそのまま行方不明にするよりも人間達に死んだと思いこませる方が色々と手間が省けるからだ。

「その後」

「やっとか……」

あれからどのくらいの時間がたったのかは知らないがこんなことならさっさと行方不明にすればよかったかもしれないと今更になって後悔している。

俺の目の前には血まみれの状態で倒れている九尾の姿があった。人間達には幻術をかけておいたのでこの九尾が死んで石になったように見えるはずだ。

「回収には成功か…」

俺はそのまま神威で転移した。
どこに転移したのかというと山奥に俺が木遁で作った家だ。

傷の手当てをしてしばらくすると目が覚めたようだ。

「ん、んん…ん!？」

目が覚めたまではよかったがいきなりすごい勢いで起きあがり俺の方を見た。

「よっ」

「お前は何をしている!?!ここはどこだ!?!」

「ここは山奥で俺はお前の傷を治してやった。どうだ？簡潔でわかりやすいだろう」

「そんなことは聞いていな！？ッ！！」

見ると傷口から血がでていた。

これだけ騒げば傷が開くのは当たり前だろう。

「言い忘れていたが静かにしないと傷口が開くぞ（ニヤリ）」

「もう遅い！痛ッ！」

「……」

「お前…実は馬鹿だろう」

「……！」

九尾はこっちを睨みつけてきたがさすがにそこまで馬鹿ではなかったようにそれだけだった。

「
…」

「なぜ助けた？」

「気まぐれだ」

「
> ● < > ● <
」

「しつこい女は嫌われるぞ」

「ふん」

こいつは静かにしていればたしかにいい女だ。

とは言っても俺からしてみればまだまだガキだな。

それにしても運のいい奴だ。

本当ならとつくに死んでいてもおかしくないほどの傷を負っていたからな。

「ところでその仮面の下はどうなっているんだ？」

やっぱり気になるのか…

この仮面の下が…

俺に会った奴はほぼ全員が仮面の下のことを聞いてくる。

「秘密だ」

「見せろ」

「だが断る」

「見せろ」

「…」

それにしてもしつこい奴だな。

このまま追い出してやろうか…

まあ、そんなことをすると今までの苦勞が水の泡になるからやらな
いかな。

「お前に紹介したい奴がいる」

「？」

「おい。そろそろ出てきたらどうだ？」

「あら、いつから気づいていたの？」

こいつは紫という名の妖怪だ。

少し前に知り合ったばかりだが俺はもつと前に会った覚えがある。
どこの山かは知らないが俺が初めてコイツと会ったときはまだ少女の姿だった。

たしかあのときは能力の実験やらで俺達に攻撃してきたので俺が月読でボロボロにしてやったはずだ。

今は成長しているがな。

コイツと再会した時は俺の服装を見て怯えていたのが印象的だったな。

あのころは仮面をつけていなかったのですぐには俺だとわからなかったようだが…

何時間か話してやるとすぐに落ち着きを取り戻した。

それでも俺に怯えたような目を向けることがあったが…
今では普通に話しかけてくるようになった。

「この九尾に最初に目をつけたのはお前だろう」

「ふふふ…そのとおりよ。私としてはその九尾をこちらに渡しても
らえるとうれしいのだけど」

「ふん。わかっている」

「おい！私を無視して話を進めるな！」

「黙れ」

「は、はい…」

俺が睨みつけるとおとなしくなった。
別に瞳力を使ったわけでも何でもないのだが…

「相変わらず怖いわね。あなたの眼」

「そうか？」

「ええ」

「それは別として九尾のことは一応礼を言っておくわ」

「前からいい式が欲しかったのよ」

「それはよかったな」

「ふふふ…」

「…ククク」

「ところで用はすんだのか？」

「ええ。それと幻想郷のこともよろしくね」

「ああ」

幻想郷はいまだに計画があるだけだ。

とは言ってもほとんど位置も決まっているから後は創るだけだな。

「じゃあな」

「またね」

そういうと九尾を連れてスキマに消えた。
ふう…これからどうしようか。

九尾（後書き）

どうでしたでしょうか？

口寄せ獣（前書き）

投下します

口寄せ獣

俺は今、船をこいでいる。

なぜかというとき寄せ獣を探すためだ。

たしかに今のままでも十分すぎるほどの戦力を俺は持っている。

だが、今の俺には相棒と呼べる存在がいない。

昔はいたが…アイツは色々と迷惑&意味不明な行動しかなかったがな。

そして、俺が船を漕いでいる理由は…勘だな。

というより俺は運命というものを信じているので何となく漕いでいるだけだったりする。

320

そして、俺は何かに誘われるようにとある島に辿り着いた。

ここはどこなのだろうか…適当に漕いでいただけなのでここがどこなのかは知らない。

適当に彷徨っていたらこの島に辿り着いた。

それだけで俺にはこの島を探索する理由になる。

「…」

なんだかなあ…

見るとそこには浜があつてその奥に森が広がっているという探せばどこにでもありそうな島だった。

さらにその奥には天をも貫く巨木があつた。

何だかあの巨木に俺の求めるものがありそうな気がしたので俺はそのまま森に足を踏み入れた。

俺が森の中初めて目にしたのは巨大なゴリラ？だった。

しばらくは俺とゴリラ？で見つめ合うというシユールな時間が過ぎ…るわけもなくいきなり俺に襲いかかってきた。

こういう大自然の中では純粹に己の力と知恵のみが武器になる。

俺はゴリラ？の拳を素手で打ち碎いた。

もはやゴリラ？の片腕は使い物にならないだろう。

「■ ■ ■！！」

ゴリラ？はあまりの痛みにわけのわからない鳴き声をあげながら俺に突進してきた。

猪じゃあるまいし…

ん？なんだか今の言葉はデジャヴな気がする…

「痛天脚」

ゴリラ？の肉体は原型をとどめないほどに滅茶苦茶になり辺り一帯が吹き飛んだ。

この分だとかかなり時間がかかるな…

そう思った俺は一気に巨木まで走ることにした。

さすがに全力ではないが走った。

走り終わったところには俺の後ろにひとつの道ができていた。

すごく…大きいです…

あらためて見ると本当にでかいな…

途中から空の上に達しているためこれ以上は実際に登ってみるしかないさそうだな。

足にチャクラを纏うとそのまま頂上を目指して走った。

この分なら楽に頂上に着きそうだな。

そんなふうに考えていた時期が俺にもありました。

何があつたのかというと途中で虫の大群に襲われたのだ。

面倒だな。

俺がそんなことを考えている間にも巨大な虫の大群は糸を飛ばしてきたりわけのわからないべたつく何かを飛ばしてきたりした。

「木遁・樹縛榮葬」

今回は空中に敵がいたので足元からではなくそのまま巨木から生えてきて一瞬で捕えそのまま圧死させた。

結果的に一本の巨木が巨木から生えた…というよりは一本の枝が追加されたような状態になった。

たとえ大木が生えても枝に見えるほどこの木は大きいのだ。

そんなことを考えながら走っていると今度は巨大なトカゲのような生物に襲われた。

ここは巨獣島とでも名付けようか…

ここは口寄せを使用する者にとってはまさに聖地と言える島だ。

しかもこのトカゲにはよく見ると翼のようなものが生えていた。

空飛ぶトカゲか…シュールだ。

まあ、こういうのを昔よく見かけたドラゴンと呼ぶのかもしれないが…

しかし、よくよく考えてみれば昔は巨大な生物や今では神獣と呼ばれるような存在がいるのが当たり前だった。

龍神も昔はよく見かけたが…今はどこにいったのやら…

その気になれば居場所を探るくらいは造作もないがな。

するとそのトカゲは火を噴いた。

火を噴く…火を噴くと言えばあの商人の方に乗っていたコカトリスを思い出すな…

ふと思ったのだがこのまま避けたら巨木に引火して大惨事になるんじゃないか？

と思った俺は水遁で対処することにした。

>これから毎日島を焼こうぜ？<

何か聞こえた気がするが気のせいだろう。

俺はチャクラで水を作り出すと術を発動させた。

「水遁・水龍弾の術」

水でできた龍は火もろともトカゲを飲み込むとそのまま落ちて行った。

これであのトカゲが俺の前に立ちふさがることはないだろう。

ところで頂上まではあとどのくらいなのだろうか…

口寄せ獣（後書き）

どうでしたでしょうか？

次回で主人公の新たな相棒が登場します。

チャクラの塊（前書き）

今回は短めです。
投下します

チャクラの塊

ふう…

あれからひたすら走り続けているがやっと頂上が見え始めたところだ。

「
■ ■ ■ ■ !」

今度は何だ？

いきなり何かの咆哮が聞こえたので見ると巨大な蜘蛛のような生物がいた。

また虫か…

ここに来るまでに何度も虫の襲われたのだ。

「
…」

「
■ ■ ■ ■ !」

糸を飛ばしてきたのでそれをかわし術を発動させた。
さつきからこれの繰り返しだ。

この島は本当にどうなっているのだろうか。

この島ははっきり言って異常だ。

この島には幻獣や巨獣がうじゃうじゃいる。

どうしてこうなったのだろうか…

「土遁・土流大河」

泥の濁流が発生し一気に蜘蛛を流していった。

これでようやく頂上に足を踏み入れることができるわけだ。

これでまた邪魔されたら…

そんなことはどうでもいいがな。

しかし、今まで気づかなかったがこの木はかなりのチャクラを持っているな…

なぜ今まで気づかなかったのだろうか。

しかし、このチャクラ…かなり薄れてはいるが十尾のチャクラと微妙に似ている気がする。

まさかとは思うがあの化け物の影響を受けてこうなったのか？

「ふむ…」

このまま放っておくのも危険だしな…

できれば他の何かに封印でもしたいものだが…

そんなことをしたら尾獣みたいになりそうだしなあ…

そつえば俺はこの島に何をしに来たんだ？

「…」

…口寄せ獣を探すためだったな。
ならいつそのこと何かの動物に封印して契約してしまえばいいだけ
じゃないか。

問題は封印する器だが…

ふと見るとすぐそこに一羽の鷹がいた。

そうであれにしよう。

俺は瞬身の術で近づくとそのまま捕獲した。

「…」

これでよし。

封印は完了した。

ところでこの鷹は何と名づけようか…

「キー！」

「うん？」

「キー！」

「そうか。キーか」

この鷹はキーと呼ぶことにした。

キーと言えどこかで聞いたことがあるような気がしなくてもないが…

まあ、気のせいだろう。

しかし、この鷹は巨大化したりしないのだろうか。

「お前は巨大化できるのか？」

「巨大化デキル」

「なん…だと…」

俺が驚いたのは巨大化できることに対してではなく人語を話したことだ。

たしかに喋ったり巨大化したり…色々できるだろうとは思っていた

が…

「じゃあやってみろ」

俺がそういうとキーはキー！と鳴き巨大化した。
言っておくが今は狙ったわけではないからな。

「ドウダ？」

「他にも何かできるのか？」

「デキル」

これは時間をかけて調べる必要がありそうだな。
それにしてもここまで良い口寄せ獣が手に入るとは思わなかった。

「あとは契約するだけだな」

「契約？」

「そうだ。契約だ」

「準備はOK？」

「準備ハオk！」

これで契約は完了と…

今日の俺は運がいいのか悪いのかわからないな。

まあ、こんなに良い口寄せ獣と契約できたのだから普通に運はいいだろう。

これからまた違った旅が楽しめそうだな。

チャクラの塊（後書き）

この木は遙か昔に主人公と戦った十尾の撒き散らしたチャクラが影響してちょうどこの島に生えていた一本の木がそれに反応して異常な成長をとげ長い年月をかけチャクラを肥大化させていったという設定です。

ただ十尾の残り滓のように何かの形をとって暴れなかっただけです
ね。

もしかしたらジ・レイモンとか人面樹みたいになって暴れていたかもしれないせん。

まあ、十尾が関わっているならありえるかなあ…なんて思った
だけですけどね。

主人公の相棒であるキーは巨木の持っていたチャクラを受け継いだ
ので尾獣並みのチャクラを持っていて風遁系の忍術を使用すること
ができます。

それと人の話を理解・使用することができます。

死を呼ぶ桜（前書き）

投下します

死を呼ぶ桜

「キー！」

「やめろオ！」

何をしているのかというと暴れているキーを止めているのだ。
昨日からこの調子だ。

一体どうしたというのか…昨日キーと契約してそのまま木遁で作った家に連れ帰ったのだがずっとキー！キー！と鳴いて暴れるせいで寝不足だ…

まあ、普段から鍛えていたおかげで何ともないがな。

すると俺が作った朝食が落ちてしまった。

「犠牲になったのだ…」

「犠牲二ナツタノダ…」

「真似をするな」

「真似ヲスルナ」

なんて奴だ…

人の真似ばかりして…いつそのこと木遁で籠でも作るか？

そうすれば…いや、それだと家に被害がでなくなるだけで肝心の鳴き声は止まらないじゃないか…

「キー！」

「いい加減にしないと怒るぞ」

「…」

なぜ鳴きやむ…

たしかに鳴きやむようにしたのは俺だが…

いままで苦労したのに一言で鳴きやまれるとちよつと…

> 睡眠時間は犠牲になったのだ…昨日から続くキーの鳴き声…その犠牲にな…く

そういえば噂で聞いたのだが西行寺という場所には西行妖と呼ばれている妖怪桜があるらしい。

今日はどうせ暇だからその桜を見に行こうと思う。

というか今すぐ行こう。そうしよう。

「キー、行くぞ」

「キー！」

俺はキーに乗ると西行妖があるという西行寺まで向かった。
だが、西行寺に向かっていている途中で運の悪いことに天狗と出会ってしまった。

「ただだよ（笑）」

「またお前達か！今日と言う今日は「お前達の相手はまた今度だ」」

「待て！」

「追えええ！！！」

まったく……しつこい奴らだな。

いい加減しつこいので神威でどこかに転送してやった。

「「「「「わああああああああああああああああああ」」」」」

「じゃあな」

ふう…

こうでもしないとどこまでも追いかけてくるからな。
今度こそ西行寺に…

「キー！」

「…」

「…やっとなつたか」

「何者だ！」

俺がため息をつきながらキーから降りるといきなり声をかけられた。
今度は何だ？と思いい見ると刀を持った人間がいた。
見た目は爺の人間だ。＞イメージとしては銀魂に出てくる夜兎の鳳仙ですく

「誰だお前」

「ダレダオマエ」

「お前たちこそ誰だ！」

「ただの観光客だ」

「キー！」

「悪いがここは観光するような場所じゃない。帰ってもらおうか」

「だが断る」

俺はそういつとそのまま西行妖のあるところまで瞬身の術で一気に移動した。

後ろを見るとさっきの奴が迫ってきていた。

視線を感じたので見ると一人の少女がこちらを見ていた。

「……」

「あなたは…誰？」

「俺か？俺は「覚悟！」」

さっきから覚悟覚悟って…

少女のほうは顔を手で覆っていた。

まったく…まるで俺がこれから死ぬみたいじゃないか。

俺は振り下ろされた刀を両手で止めた。

真剣白刃取りってやつだ。

刀を振り下ろした奴とすぐそこにいた少女は驚いたようだった。

まあ、普通の人間に今のは止められないだろうな。

「何イ!？」

「すごい…」

「キー！」

「キー、お前は少し静かにしろ」

「静力ニシロ! 静力ニシロ! キー！」

「…」

しかし、いつまでたっても同じような反応しか返さない俺に飽きた

らしく、すぐに静かになった。

何がしたかったんだ…

他の二人はというとそのままの状態だったので自己紹介をすることにした。

「ふう…俺のことはトビとでも呼ぶがいい。少しの間世話になるの
でな」

「何だと!？」

「妖忌」

「しかし…幽々子様」

刀を持った人間は妖忌と言らしい。

それで少女が幽々子か…どうやら少女のほうに刀のガキよりも立場
が上のような。

主従関係だな。

どうやら刀のガキは俺がここにいることが気に入らないらしい。
歓迎されているのか…歓迎されていないのか…

「俺はこの桜を見に来ただけだ」

「お前とは話していない」

本当に面倒な奴だな…

さつきから何なんだこいつは…

俺が何をしたというのだ。こいつは俺に何か恨みでもあるのか？

「駄目！」

俺が桜に近づこうとすると少女が叫んだ。

今日は本当につるさい日だな。

朝からキーキーキーうるさいし…朝食は犠牲になるし…苦勞して西行寺に来たかと思えば一刀両断しようとしてくるし…少女には叫ばれるし…

はあ…

「何ともないぞ」

俺がただの人間だったら死んでいただろう。

だが、俺はこの程度では死なない。

というかこれくらいで死んでいたら俺はいまごろこの世にはいないだろう。

とつくの昔にあの世行きだ。

「嘘……」

「……信じられん」

「そんなに俺に死んでほしいのか？」

「え……いや……えと……その……」

「はぁ……もういい」

「私に近寄らないで！」

「なぜだ？」

「私に近づいたら……死んじゃうから……」

俺は少女にデコピンをしてやった。

「痛っ」

「なら何で俺は生きているんだ？」

「え……」

「とりあえず俺はここに泊まるからな」

「死なないの？」

「もう一度同じことを言ったら……」

「言ったら？」

「ふん……」

「？」

何で俺がこんなガキと話さなければいけないんだ？

そもそもどうしてこうなった……

俺は別に西行寺に泊まりに来たわけでもここにおしゃべりに来たわけでもないぞ。

……これも何かの縁と言っちゃつか。

騒々しいが……こんな生活もいいな……

死を呼ぶ桜（後書き）

どうでしたでしょうか？

なんだか最近テンションが低いので駄文ばかりな気がしますが…

それと西行寺の話が終わったら少し休みます

平和（前書き）

投下します

平和

あれから数日たったのだが…

「…どうしてあなたがここにいるの？」

「…お前こそ」

今は紫と話している。

どうしてこうなったかという俺が庭で桜を眺めていると俺の横にスキマが現れその中から紫がでてきたのだ。

しかし、なぜ紫がこんなところにいるのだろうか。

それで今はお互いに同じ質問をしている。

「あなた…まさか、幽々子を狙って…」

「お前は馬鹿か。何が悲しくてあんなガキを狙わなければならんだ」

本当に馬鹿と言わざるを得ない。

ふと視線を感じたので見ると涙目で幽々子がこちらを見ていた。

「ひどい…」

「げ、幻術だ」

そう言って誤魔化そうとした俺だが当然通用するわけもなく言葉のダブルパンチを食らった。

「幻術なわけがないじゃない」

「トビは私のことが嫌い？」

「どちらかと言えば好きだな」

「え…／／／」

「あなた…やっぱり…」

「おい。何を勘違いしているのかは知らんが…」

「トビに告白されちゃった…／／／」

どうしてそうなった…

俺はどちらかというときだと言っただけで別にそういう意味で言っただけではないのだが…

「何ですとオ！トビ…貴様ア！！」

いきなり妖忌が現れたかと思うと刀を抜き斬りかかってきた。

「九頭龍閃！」

「落ちて着「落ちて着いていられるかア！！」」

次の瞬間には一気に斬撃を受け吹き飛ば破目になった。
もちろん分身だがな。

「分身だ」

「死ねえ！」

猛突進してきたかと思うと俺の脚を掴み振り回したあとに思いっきりぶん投げた。

俺は回転しながら吹き飛び岩を貫通し壁に叩きつけられた。

…まったく乱暴な奴だ。

当然それだけで終わるわけもなく腕を後ろに引くとそのままパンチの嵐で殴られまくった後に思いつきりぶん殴られた。

それまでのパンチで壁に亀裂が入っていたのでまた吹き飛ばすことになった。

何回殴れば気が済むんだ？

俺が起きあがると既に頭上に奴がいて刀を振り下ろしてきた。

俺は刀を口寄せすると振り下ろされた刀を受け止めた。

「仮面に罅が入ってしまったぞ。どうしてくれるんだ」

「知るかアアア！」

そこからはまさに神速の領域だった。
お互いに神速の斬撃をぶつけあった。

「とっておきを見せてやる」

「何？」

「秘剣・燕返し！」

「ぬおおお！？」

同時に放たれた三つの斬撃は妖忌に直撃し吹き飛んで行った。
頑丈な奴だな…

「ぐはっ…ぬう…なかなかやるな」

「お前もいい加減に諦めろ」

「む？お前…仮面が半分割れているぞ」

「何だと…」

俺は慌てて手鏡を口寄せすると自分の顔を見てみた。
たしかに割れているな。

長い間使っていたから愛着のようなものが湧いていたのだが…
壊れてしまったものは仕方がない。

「新しいのに変えておくか」

俺は一瞬で着替えを済ませた。 >天の声：第四次忍界大戦のときの
トビの恰好ですく

そのあまりの早さに今の戦いを見ていた幽々子と紫も驚いたようだった。

俺と斬りあっていた妖忌は少し驚いたようだった。

「相変わらずセンスがないわね…」

「…黙れ」

「ふふっ…ははは…あはははは！」

俺が紫をにらんでいると何がおもしろかったのか急に幽々子が笑いだした。

「何がおかしい？」

「だって…だって…ぷっ…あははははは！！」

今度は腹を抱えて笑いだした。何がそんなに面白かったんだ…俺が疑問に思っているのと妖忌は少し顔が緩んでいた。だが、俺の視線に気づいたようですぐにいつもの顔に戻った。

「意味がわからない…だがそこがいい…ククク」

「トビ！もし幽々子に手を出したら…」

「クククク…俺が手を出すわけがないだろう。それに幽々子には心強い親友と庭師がいるじゃないか」

「ふふふ…それもそうね」

「はっはっはっ！俺がいるからには幽々子様に手出しはせん！」

「「「はははははは！」「」「」

「ハハハハ！」

しばらく三人で笑っているとそれにキーも参加してきた。
こうしていると昔を思い出すな…

平和（後書き）

どうでしたでしょうか？

西行寺幽々子（前書き）

気がつけばお気に入り数100突破ですね。
ありがとうございます。

投下します

西行寺幽々子

あの妙な勘違いがあった日から数日が経過した。
そういえば俺は何をしにここに来たのだろうか…

西行妖を見に來ただけのはずだが…

まあ、十分楽しめているから問題はない…はずだ。

…俺は今日もいつもと何も変わらない平和な一日だと思っていた。
だが、現実是非常である。

俺は朝から幽々子の様子がおかしいことに気づいたので静かな夜に
話すことにしたのだ。
何があつたんだ？と…

だが、俺が幽々子と話すことは叶わなかった。
俺がそれを見つけたのは夕食が終つてすぐだった。

幽々子は死んでいた。

だが、不思議と何とも思わなかった。

悲しくもなければ涙がでることもない。なぜ死んでいるのかという
疑問さえなかった。

調べてみると短刀を握っていた。
これで自分を刺して自殺したらしい。

「こんなところで何をし…ッ!!?」

声がしたほうを見ると紫がいた。

そして、信じられないものを見るような目で死んだ幽々子を見ていた。

「な、何を…」

「言っておくが俺が殺ったんじゃないぞ」

「じゃ…じゃあ…何で死んでるの!?」

「自殺だな。おそらく自分のせいで周りの人間や動物が死んでいくことに耐えられなかったんだろう」

「なっ!?」

「…あなたは どうしてそんなに冷静なの!?」

「なぜか?だと。俺自身もわからん」

「
…」

「それよりも西行妖の様子が変だぞ」

「…どうして…どうしてそんなに…冷たい目をしてるのよ！幽々子が死んだのよ！？」

「何度も同じことを言わせるな」

たしかに今の俺は冷たいやつに見えるだろう。

それにその気になれば死んだ幽々子を生き返らせることもできる。

だが、幽々子は自分のせいで周りの人間や動物が死んでいくことに耐えきれずに自殺という道を選んだのだ。

そんな幽々子を生き返らせるというのはただの自己満足に過ぎない。俺からしてみればそっちのほうがよほど残酷で非道だ。

「ッ！！」

「西行妖を封印しなければなるまい」

「…そうね」

「
…」

「ッ！私もこれまで気づかなかったけどとんでもない妖力ね。…私でも封印できるかどうか…」

「
…」

「なら幽々子を使えばいい」

「なっ！？」

「お前はそれしか言えんのか」

「幽々子の肉体を器として封印する。そうすればこちらから封印を解かない限りは西行妖はただの桜も同然になる」

「そうすれば亡霊という形で甦らせることも可能だ。これで満足か？」

「まあ、お前が望まないというのなら西行妖を消滅させれば良いだ

けの話だが…」

別に不可能な話ではない。

たしかにあそこまでの妖力を持っているのなら片っ端から再生だの何だので面倒だろうが…

何度でも再生するというのなら天照で燃やし尽くすだけだ。

他にも十拳剣で封印するのかな。

「…お願い」

「…」

これから封印するわけだが…

幽々子の肉体に封印したうえで四黒霧陣でも使えばいいだろう。

俺はまず幽々子の肉体に西行妖の妖力を封印した。

その次に壺を棺桶を口寄せすると分身したうえで術を発動させた。

「四黒霧陣」

念には念を入れて結界を厳重にするために札を貼っておいた。
あとはこれを西行妖の根元に埋めるだけだ。

「…これでいいだろう」

「幽々子様！」

「妖忌か。遅かったな」

「トビ！何をしている！」

「妖忌…実は…」

どうやら妖忌に説明してやるようだ。

「な…」

「それよりも幽々子は…」

「そういえばそうだったな」

その言葉とともに白い煙が突如発生した。
その煙が無くなるとそこには幽々子がいた。

「ゆ、幽々子！」

「幽々子様！」

紫と妖忌は幽々子に向かって走った。

だが、次の瞬間に時が止まったかのようにその足を止めた。

「あなたたちは…誰？」

「「な…」」

紫と妖忌は言葉が出ないようだった。
そして、こちらを見てきた。

「記憶喪失か…？　そういえば言い忘れていたが…副作用のようなもの
だろうな」

「そ、そんな…」

「何という…」

「まあ、何も悪いことばかりではないだろう。またこんなことになるのを防げるわけだからな」

「…」

「そうね…」

「どこに行くの？」

「あての無い旅だ」

「…そう」

「じゃあな」

そもそも俺は少し西行妖を見ただけでそのまま帰るつもりだったのだ。

「キー、帰るぞ」

キーはいつもよりも大人しく、俺が乗るとそのまま静かに飛び立った。

西行寺幽々子（後書き）

今の自分に足りないもの…それは情熱・思想・理念・頭脳・気品・優雅さ・勤勉さ！そしてなによりもオオオオオオオオオオッ！！
妄想力（＋テンション）が足りない！！

月面戦争（前書き）

投下します

月面戦争

「キー！」

もう朝か…

できればもう少しだけ布団に包まっていたいのだが…

だが、キーは俺が起きるまで鳴きやむ気はないらしくそれからもキ
ーキーキーキーと鳴いていた。

「…起きたぞ」

俺がそういうとキーは鳴きやんだ。そこまではよかったのだが…
俺が上半身を起こすと同時に俺の目の前にスキマが開いた。

「何の用だ？」

「朝から不機嫌そうね」

「そんなことを言いにくたわけじゃないだろう」

「うふふふ、そうだと言ったら？」

「お前にも俺と同じ気持ちを味わわせてやる」

「おお怖い怖い」

「もう一度だけ聞くが何の用だ？」

これでふざけたことを言ったら不眠症にしてやる。
月読でもかけてやるうか…
まあ、さすがにないとは思うがな。

「ええ、実は近々月と戦争をするつもりなの」

「お前は馬鹿か？頭がおかしいのか？暑さで頭がやられたか？なんなら俺が診てやってもいいぞ」

「なつ、何もそこまで言わな」ひとつだけ聞かせろ」

「？」

「お前はなぜ月に戦争を仕掛けようと思ったんだ？」

これは重要なことだ。

まあ、だいたいの予想はついているがな。

こいつは月の民の恐ろしさを知らないのだろう。

その気になれば俺一人でも月を滅ぼすくらいはたやすいがそれはあくまで俺がそれだけの力を持っているからだ。

妖怪たちはたしかに強い。

だがそれは相手がただの人間だった場合の話だ。

月の技術力は凄まじい。

爆弾一つ投下するだけで地球に存在するすべての生物が死に絶えるだろう。

もちろんそんなことは俺がさせないがな。

「月の技術力が欲しいからよ」

「本当か？」

「随分と疑い深いのね」

「お前は胡散臭いからな」

悪意は感じられないしなあ…

しかし、どこことなく胡散臭いのだ。

「ひとつ警告しておくが…」

「何かしら？」

「断言しよう。お前達では絶対に月の民には敵わない」

「それでも戦争には参加してくれるんでしょう？」

「お前達だけでは目も当てられない結果を招くだけだろうからな」

「心配症なのね」

「ふん」

「明日の夜に迎えに来るわ」

「ああ」

（翌日）

「キー！」

「…あと五百「来たわよ」」

「もう来たのか」

「ええ、妖怪たちが待っているわ。戦いたくてうずうずしているみたい」

「…月の民は愚か者だが妖怪はそれ以上の大馬鹿者だな…（ボソッ）」

「何か言ったかしら？」

「何も言っていないぞ」

「そう…行くわよ！」

「ちょっと待」

俺が待てと言おうとしたが時すでに遅し。
足元にスキマが開き俺はそのまま落ちて行った。

まあ、普通に浮けばよかったただけだな。
何をしようとしたのかというときーを連れて行こうと思ったのだ。
だが、口寄せをすればいいだけの話なので俺はそのまま目的地まで
大人しくすることにした。

「ついたか…」

そこには辺り一面を埋め尽くすほどの妖怪の大軍勢がいた。
昔も似たような光景を見たことがあるが…
今と昔では覚悟が違う。

こちらは昔とは違い余裕といった様子で騒いでいる。
昔はもつと落ち着きがあり一切の油断もなかった。

まあ、都市に攻め込む前に月の民の恐ろしさを知ったからではある
のだが…

「行くわよ」

その言葉とともに巨大なスキマが開いた。

「相変わらず殺風景なところだな」

「「「「「うおおおおおおおおおおおおおお
お！ー！」「」「」

「
…」

妖怪たちには見えていないのだろうが俺の眼にはしっかりと月の民の軍勢が映っていた。

光学迷彩か？

ただ透明になっているだけではないのか…

それとも妖怪相手にはこれで十分だと考えているのか…

「神羅天征」

俺が神羅天征を使っただのは月の民が一齐にレーザーのようなものを撃ってきたからだ。

その瞬間、月の民は自分達の攻撃で吹き飛ばすことになった。

「な…何が…」

「わかっていないようだから教えてやる」

「今のはただ単に月の民が透明になっていたただけだ」

「そして、俺がいなければほぼ壊滅に近い状態になっていただろう

な」

「なっ……」

俺の言葉に紫は絶句したようだった。

おそらくこんなことは予想していなかったのだろう。

そして、月の民達からこんな言葉が聞こえてきた。

「この力……ま、まさか六道の……」

俺が長年姿を見せなかったから死んだとも思っていたのだろうか。
月の民はいまだに俺のことを覚えているらしい。

「六道？ どういう……お前が知る必要はない……」

「ハッ！ 油断しただけだ！ 俺達は圧倒的に優勢だ！ あの六道何とか
って奴もぶち殺してやれ！」

月の民はなにを勘違いしているのだろうか……
数の暴力で何とかなるとでも思っているのだろうか？
やはり愚者はいつまでたっても愚者だな。

だが、月の民の中にも少しは利口な奴がいたらしい。

俺の名前を聞いただけで震えだし、引き返そうと武器を放り出して逃げている奴もいた。

「ふん、馬鹿共め。あんな仮面をつけている奴の何が怖いというのだ」

「いけいけえ！一気に攻めろオオ！」

今度は巨大なミサイルやらレーザーガンのようなものを持ちだしてきた。

いくら神羅天征で弾き返したとはいえやはり被害はでるもので左右と後ろの妖怪たちは数が減っていた。

「埒が明かん」

このままやつてもジリ貧だな。

俺はこのまま一気に攻めることにした。

「口寄せの術！」

「俺ノ出番力！」

俺はそのままキーに飛び乗ると戦場を旋回した。
ふむ…近代兵器のオンパレードだな。

中には見たことのあるものもあるが初めて見るものもある。

「嫌な予感がするな…」

俺がその言葉を発したのとほぼ同時に妖怪の大部分が消滅した。
いや、分解されたのか。

見ると扇子を持った月の民が一人とその横に神の力を身にまとった
奴がいた。

…月の民の中でもかなりの地位を誇る綿月家のガキだな。

「しかし、森を素粒子レベルで一瞬で浄化する扇子に八百万の神の
力か…厄介だな」

何せ適当に扇子を振り回していれば勝てるのだからこれほど厄介な
武器も少ないだろう。

まあ、一歩間違えば味方も壊滅する危険があるがな。

そして、八百万の神の力を行使するガキも妖怪たちにとってはかな
り厄介だろう。

>能力的に万華鏡写輪眼と名前が被ってる部分が…<

「やれ」

俺がそういうとキーは風遁・練空弾を放った。

キーは次から次へとそれを放ち月の民に壊滅的な被害をだした。だが、さすがにいつまでもやられてばかりいる月の民ではない。

今度はいくつもの近代兵器の集中砲火に神の力を宿した炎、扇子による風と避けるのがかなり面倒だった。

俺は一瞬だけキーから離れると空中で術を放った。

「火遁・豪焰球」

かなりの広範囲を殲滅する術なのでもちろんかなり後方に放ったがな。

それでも衝撃波やらなんやらで凄まじい被害がでたようだ。

今で四分の三以上は削れたな。

こちら側にいた月の民もかなりの被害を受け動けるのは綿月姉妹だけのようだ。

だが、少し遅かったようで妖怪は壊滅していた。

紫はスキマを開いて俺の方を見ていた。

脱出の準備は既に整っているということか…

「キー、このままスキマに突っ込め」

「キー！」

俺はスキマに入る瞬間に紫の腕を掴むとスキマを一気に抜けた。
まったく…結局何のために戦争何かしたのやら…

「…」

「おい」

紫はと言うと声をかけても返事はなかった。
放心状態と言う奴だろう。

俺が冷静なのはこの結果が簡単に予想できたからだ。
それにあの妖怪たちと昔の妖怪たちと一緒ににはしなくなかったとい
うのが一番の理由だ。

「キー、帰るぞ」

俺はそのまま紫を放置し、家に帰った。

月面戦争（後書き）

更新ペースが落ちると思うのでご了承ください

闇の妖怪（前書き）

投下します

闇の妖怪

「ふう……」

今は何をしているのかというと団子屋でゆっくりしている。
だが、ここであの商人と再会した。

「何でお前がここにいるんだ？」

「はて？ 誰」とぼけても無駄だ」……」

「いやゝ久しぶりっすねえ、旦那」

「俺の目にはお前があの時とまったく変わっていないように見えるが……」

「それはお互いさまじゃないっすか」

やはり俺の目に狂いはなかったな。

こいつは確実に人間ではない。

いや、仮に人間だったとしても既に人とは言えないだろう。

「ところで旦那」

「何だ？」

「この辺りでは闇を自由自在に操り人間を食ってしまう妖怪がでるんすけどね？」

「…それで今回も俺に護衛を頼もうというわけか」

「さすが旦那！話が早い！」

「煽てても何も出ないぞ」

「…フヒヒ…何のことっすか？」

「ふん。さっさと支度をすませろ」

「いやんっ！旦那はせつかちっすね〜」

まったく…相変らずふざけた奴だ。

何の縁かは知らんがこんな奴とはできれば遭遇したくないというのが俺の本音だ。

アイツは昔と変わらず黒のロングコートにサングラス、肩にコカトリスといういろんな意味でおかしい格好だ。

「旦那様待ってくださいよ」

「断る」

「旦那様」

「何だ？」

「仮にも旦那は俺の護衛なんすからしつかりしてくださいよ」

「前々から気になっていたのだがお前は何者だ？」

「ただの商人っす」

「はあ…もついい」

「ところでその妖怪と言っのはどんな奴だ？」

「それは黒いドレスに髪はロングで羽がはえてるらしいっす」

「他にはないのか？？」

「十字剣をもっていて…ついでに巨乳らしいっすよ？（ニヤニヤ）」

「だからどうした」

「しっかし旦那も欲がないっすね。その気になれば女なんて抱き放題でしょうに」

「それに巨乳と言ったら男のロマンがつまりにつまったもんでしょっ？」

「くだらん。そもそも乳というのはでかければいいというものではない。でかすぎれば戦闘の邪魔になるうえにあまりにでかいと逆にグロテスクだ。」

「それどころか自分自身を傷つけることにもなりかねん」

「うわぁ…。乳についてマジで語る人とかはじめて見たわ」

くだらん。

そもそもあんなものはただの脂肪の塊に過ぎん。

一体あれの何がいいのやら…

俺には人間の考えていることがさっぱりだ。

俺も人間だな。

「じゃあ旦那はつるぺた派っすか」

「つるぺた？…ああ、貧乳というやつか。別に俺はどっちでもいいが…」

「ほほう…どちらでも構わないと…」

「何か悪いか？」

「じゃあ髪はツインテールかポニーテールかどっちっすか？」

「お前は俺に何を言わせようとしているんだ？」

「フヒヒ…サーセン（笑）」

まったくもって反省の色が見えない。

そもそも前に会ったときと姿が変わらないということは何らかの方法で誤魔化しているか不老不死…あるいはそれに近いものということだ。

それなら外見はともかく中身はかなりの年寄りのはずだ。

精神年齢はとくに人間の限界を超えているだろう。

それがまるでガキのように…

まあ、芝居でわざとこんな態度をとっているという可能性も否定できんがな。

「旦那」

「わかつている」

「人間が何の用かしら？」

そこにはたしかにこの商人が言った通りの姿をした妖怪がいた。

しかし、会った瞬間わかったことだが…

かなりプライドが高いようだ。

こういう手合いはプライドを傷つけてしまつと何をしてくるかわからないので注意が必要だ。

「旦那！頑張ってくださいよ！」

商人はいつの間にか離れたところにいた。

本当は俺を応援する気など欠片もないのだろうか。

「私を無視するとはいい度胸ね」

「はあ……」

はあ……

さっそくプライドを傷つけてしまったようだ。

俺はこういう奴が苦手だ。

無駄にプライドだけは高い相手とはちゃんとした会話が成立しないことが多い。

諏訪大戦のときの神々がいい例だろう。

「死になさい！」

そういうと奴は無造作に腕を振るった。

俺は瞬身の術で避けたが……

俺のさつきまでいた場所は綺麗さっぱり消滅していた。

あの闇に触れた物は消滅するのか……

天照並みに厄介な能力だな。

俺がそんなことを考えていると奴は剣を振り下ろした。
すると振り下ろされた剣から闇が放出されこちらに向かってきた。

天照を使うか。

厄介な能力ではあるが防げないことはない。
須佐能乎で防いだり…天照で燃やしたり…

「なっ!？」

「何をした!」

「言う必要があるのか？」

「くっ…」

「…あなた本当に人間？」

「失敬な。俺はれっきとした人間だ」

「…少しだけ私の力の一部を見せてあげるわ」

「ほう……」

奴がそういつと闇が一段と黒くなりさらに闇の量が増えた。

一部と言つことはこれでもまだ本気ではないということだろう。
本当に面倒だな…

「少しはあなたからも攻撃したらどうかしら？」

「何かしてみなさい。真の絶望と言つものを味わわせてあげるわ」

「そうさせてもらつとしよう。風遁・大突破」

俺の予想では闇を展開して防ぎそのまま闇を俺に向けて放つつもり
だろう。

俺の放った術は途中までは猛威を振るっていたが闇に触れると消え
てしまった。

「無駄よ」

そして、俺の予想通り闇は俺に向かってまるで槍のような形状で放
たれた。

あちらが全てを飲み込む闇を操るといふのならこちらは全てを燃や

し尽くす黒炎で戦うまでだ。

「あなたもしぶといわね」

「ふん」

「黒い炎…それで私の闇を…」

俺は黒炎を操り槍の形に変化させた。

別に炎遁を使わずとも形を変えるくらいは簡単にできる。

まあ、誰にでもできるのかというところではないのだが…

そして、俺は黒炎で作った槍をそのまま奴に目掛けて投擲した。

黒炎は闇の壁を貫通し奴に当たる…と思われたが当たる寸前で剣を振るい相殺したようだ。

そして、振るわれた剣からは闇が放たれた。

最初に放ったものとは似ても似つかない状態でまるで黒いビームのようなものになっていた。

ちょうど時の咆哮を黒くしたような見た目だ。

「あなた何者？」

「今更それを聞くか…」

「とりあえずトビと呼べ」

「相手が名乗ったからには私も名乗らないわけにはいかないわね」

「私の名はルーミア。闇を統べるものよ」

「ルーミアか…覚えておこう」

「そろそろ私も本気を出させてもらうわ」

「これは…」

奴の言葉とともにこの世界は夜になった。
とんでもない能力だな。

闇を操るだけでなく夜にしてしまうとは…

「ここは私が支配する世界。私の前ではあなたも虫けら同然よ」

「ククク…おもしろい。やってみろ」

俺がそういつと奴は拳を握った。

俺がそれを見ているといきなり俺の体に衝撃が来た。
まるで何かに握られているようだ。

「ここは私が支配する世界」…そういうことが。

おそらくこの世界では月読のようにルーミアによって時間やその他
もろもろが支配されているのだろう。

空間も掌握しているのか…

それにしても厄介だな。

今は痛みのいの字も出ない程度だが…

すると急に俺を握る力が強くなった。

このまま俺を握りつぶすつもりか。

だが…

次の瞬間には俺を握りつぶそうとしていた力は吹き飛びルーミアの
右腕が宙を舞った。

「え？」

ルーミアはそのことが理解できていないようだったが少しするとや
つと理解したのか吹き飛んだ腕のあったところを残った左腕で押さ
えた。

だが、気がつけばルーミアの腕は元通りになっていた。
闇で腕を補ったのか。

「あなたのその力…あなたは一体…」

俺が何をしたのかという十尾のチャクラを少しだけ使って俺を拘束していた力と奴の握りしめていた方の腕を付け根から吹き飛ばしたのだ。

「たしかにお前は強い。だが無力だ」

十尾とは何というか…今でもチャクラを奪い合っている関係だ。

できれば和解したいとろだが…俺の中にいる奴は俺と和解する気など皆無なようでまともな会話になったことはほとんどない。

たまにこうやってチャクラを奪い取り使っているくらいだ。

まあ、それでも封印する力が強いせいかほとんど奴は抵抗できていないがな。

いつか和解できるといいが…

「ぐっ…」

そこからは圧倒的なまでの力でまさに赤子に暴力を振るっているような一方的な状態になった。

まあ、十尾の力を使わずとも抜け出すことは可能だったかな。

「ハア…ハア…ぐはっ！」

奴は何とか剣を杖代わりにしてかろうじて立っている状態で全身血まみれで腕も足も震えていた。

こんな状態になっても戦意を喪失しないとは…

ルーミアの精神力の強さには驚かされる。

だが、これは勇気ではなくもはや蛮勇だ。

「私は…私は…」

ルーミアは何かを言おうとしていたがそれを口にする前に倒れてしまった。

そして、闇は消え周囲はいつもどおりの…とはいかないが少なくとも夜ではなくなった。

「旦那！いや！お見事っす！」

「ところでそいつはどうするんすか？」

「…まさか」

「そのまさかだ」

「…orz」

「ほらさっさとしろ」

俺は倒れているルーミアの傷を治してやると神威で異空間に転送した。

「ちょっと旦那ー！待ってくださいよー！」

はぁ…とじろでじろしてこつなっ たんだっ たか…

闇の妖怪（後書き）

商人が再登場しましたね。

あとEXルーミアも…性能はかなりチートですね（笑）

それでも主人公には敵わないという…

十尾と主人公が和解…

ちゃんとその話も書いた方がいいのやら…

書きたい…書きたくない…というよりはうまい話が思いつかないだけですが…（汗）

余談ですが 昨日この話を書いていたら突然消えたんですよ…

まただよ（笑）って感じてしたが…

時間は犠牲になったのだ…昨日から書いていた話…その犠牲にな…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8782x/>

東方仙人伝

2011年11月28日10時00分発行